

# 眼球職人デラ

↳ ② ダルマスカ公妃の愛獣

病葉 雨月

眼球職人デラ ② ダルマスカ公妃の愛獣

目次

序章	獣	……	三
第一章	神の根城	……	六
第二章	箱の中の男	……	六〇
第三章	哀と愛しみの狭間で	……	一二〇
第四章	愛と哀しみの狭間で	……	一九八
終章	猫の瞳と魔女の夜会	……	二一七

## 序章、獣

鬱蒼と茂る樹林のなかを、ひとりのうら若き乙女が走っていた。

華奢なその身に鞭を打ち、スカートが汚れることさえ気にもとめず、彼女は一心不乱に草の根をふみつけていく。空には太陽がのぼっているというのに、彼女の全身は芯から冷え切っていた。平凡な村娘にとつて、血の気がひくという表現をこのときほど実感したことはないだろう。乱れる呼吸を押さえつけ、彼女は何度もうしろをふりかえる。

——何もない。

が、なにかおそろしい気配がする。

彼女の直感は冴えていた。

ざわめく木々のあいだから、邪悪な影が静かに追いかけてきていた。姿こそ目でとらえられないが、その理に反する嫌な腐敗感はたしかなものであり、乙女の顔はまたいつそう青ざめていく。と、そのとき、彼女が地面から突き出た石の先端につまづき、派手に転んでしまう。彼女はあわててからだを起こし、ふりかえった。そこにはなんら変哲のない森が広がっているだけだが……。

——安心などできない。

彼女は四つん這いのまま、近くにあった大きな茂みのなかへと入っていった。

茂みの奥は草地になっているが、岩山の麓という地形だけあってそこかしこに大きな岩石が生えていた。岩と土によって成された地盤はいかめしく、ちよつと行つたところでは削れた岩盤が歪な階段をつくっている。足場は悪いが下りられないわけではない。彼女は意を決して岩の階段に足をかけた。

岩壁に手をそえ、転げ落ちないよう慎重に足を運び、下りていく。

普段から薬草を求めて起伏の激しい森のなかを歩き回ることが多いため、彼女の動きは可憐な見た目に反してずつと速かった。彼女はあつというまに岩の段差を下りきり、新たに現れた草木の生える平地へと足をつける。次いで彼女はそこにあつた一番大きな岩石のうしろに身を隠した。

口を両手でおさえ、息を殺してじつと待つ。

と、岩石の向こう側で一瞬、何かが蠢く気配がする。

女性はゾツとしてその身を凍らせた。

下卑た唸り声が彼女の耳朶をいやらしくなでていく。それと同時に、あたりには鼻をつく悪臭が漂いはじめていた。かすかに聞こえてくる砂利を踏む音に背筋を震わせながら、彼女は身動きひとつせず耐え続ける。じりじりと焼けつくような恐怖心を押し殺し、神さまに祈りを捧げながら、ずつと、ずつと……。

それから、どれほどの時間が経ったのだろうか。

気づけば、圧迫感は消えていた。

女性は目をぱちぱちさせながら、岩かげからすこしだけ顔をのぞかせてみる。

風にそよぐ樹林帯と、おごそかな岩々の群れ、そこにはいつもの風景が広がっていた。見上げれば、空には小鳥がとんでおり、陽光に小さな影を落としている。その羽音に緊張の糸をほどかれ、女性はようやく安堵するのだった。彼女が深呼吸を繰り返し、岩の背にほっとしなだれかかる。そして懐から一通の封筒をとり出し、ノドをぐくりと鳴らした。彼女は何かを決心したかのように再び歩き出そうとする。が、そのとき、持っていた封筒の表面にしずくがぼたりと滲み、シミをつくった。汗ではない。かといって雨でもなかった。だとしたら、これはいったい――。

ハッとして女性は顔を上げる。

瞬間、彼女の視界が暗闇のなかに消える。

彼女は手足をバタつかせて抵抗したが、非力なそのからだは無情にも岩の背を擦りながらどんどん引き上げられていった。彼女の手から封筒がすべり落ち、風にゆられて飛んでいく。そして血しぶきが激しく飛び散り、地面に落ちた封筒のはしっこを真っ赤に染めあげるのであった……。

## 第一章、神の根城

神さまといえ、たいていの人は雲の上の立派な宮殿に住んでいるのをイメージするかもしれない。もしくは、東洋的な文化思想の持ち主であれば、山奥の静謐な場所せいひつに建てられた社やしろや祠ほらを思い出すのではないだろうか。しかしながら、この世界を創造した神さまの根城はすこしばかり趣向が違う。

異空間に連なる巨大な屋敷——警女ごせの宿。

それは創世の五大魔術師のひとり、眼球職人デラが経営する不思議な館だ。

そしてその超常怪異あふれる神域の玄関前に、いま、ひとりの少年がほうきを持って立っていた。

「ふう、こんなところかな……」

山盛りになった落ち葉の前に、少年がひと息つく。

彼は大きく伸びをすると、自分の背後にそびえる例の巨大な屋敷を仰ぎ見た。

——嗚呼、なんとという奇想天外な建築美だろうか。

一見すると、木造の古びた旅籠はたごのような造形だが、その端々に凝らされた意匠には毎度のことながら度肝を抜かされる。例えば、瓦で成された広大な三角屋根の下では、六芒星を象った

紫水晶色の大きな紋章が描かれており、さらにその真ん中にはヤギに似た謎の悪魔的生物の生首が壁からよきつと生えていた。そしてその異様な生首が見下ろす先には、この家の屋号である【警女の宿】の文字が立派な木の板にしかと刻みこまれている。それら奇怪な造形物の存在はすさまじいものだった。

しかし存在感といえは、もうひとつ異彩を放っているものがある。

風格ある屋号看板の両脇、つまり、屋敷の門の左右に並び立つ二体の鬼神像だ。

天を穿つ勇ましいツノに獅子のごとく逆立つたてがみ、武骨な化粧まわしを腰にまきつけたたぐま遅しい二匹の怪物らは、その手に長大な戦斧と刀剣を握りしめていた。顔面にはそれぞれ白い布が垂らされており、すみの破れ穴からは恐ろしい瞳が覗いている。そしてその破れ穴を中心に角張った風車のような文様が描かれていた。彼らのその風貌たるやまさに門番といった出で立ちで、黒鉄色の像ゆえに彩色こそ分らなかったが、対峙する者にとごとく地獄の炎を連想させるのだった。

見れば見るほど信じがたい光景だ。

少年はいまでもこの光景が夢の産物ではないかと疑ってしまうことがある。

とはいえ、これは決して夢などではない。彼はここにくることを自ら望み、そして勝ち得たのだ。

彼は自分の右半面につけられた鉄格子つきの黒い円窓眼帯にふれ、思い出す。

はじめりは、崖の上から転落したことだった。

彼はそのとき右目を潰すという大きな怪我を負ったのだが、そんな彼を介抱してくれた人物こそ、この瞽女の宿の女主人である眼球職人デラそのひとだったのだ。怪我の後遺症で記憶喪失となった彼はその後もしばらく瞽女の宿で養生を続けていたのだが、運命とは奇妙かつ皮肉なもので、彼は自身の過去に絡めとられるかのように壮大な物語の渦中へとその身を投げ入れることになるのであった。封印された人間の起源を知り、また歴史の裏で暗躍する原書協会グンテラライエという組織とも一戦を交え、そのほか異次元の怪物や魔眼の発動など、さまざまなきことが暗黒の地下空間を舞台に起こったが、最終的にはデラの助力を得ることできなきを得られたのである。そうしてすべてに決着がついたあと、少年は瞽女の宿にその身を置くことを決めていた。彼はデラに弟子入りを懇願し、なんとか許しをもらうことに成功する。それゆえ、彼は魔術やこの世界のことを教えてもらうかたわら、こうして瞽女の宿の従業員として働いているのだった。

少年がほっぺを叩き、気合を入れる。

彼は集めた落ち葉をゴミ袋につめ込み処分する。

と、それから、彼は瞽女の宿の大浴場へと足を運んだ。

大理石の床をブラシでみがき、風呂桶を片づけ、水温をチェックする。

湯殿は広く、また壮麗で、まるで古代の神殿を思わせるような外観を呈していた。設えられ

たお風呂も多岐にわたり、中央には円形の巨大な浴槽が、また左手と右手には長い洞窟風呂が弧を描くように掘られており、それらふたつの洞窟が交わる部分では熱帯地域を思わせる密林風の内装が広がっていた。これだけでも敷地としてはかなり広いのだが、湯殿はさらに二階建ての構造になっているのだから驚きである。しかも、二階にはデラさんお墨つきの露天風呂もあるのだ。

少年が二階に上がり、露天風呂へと移動する。

と、見れば絶景、浸かれば極楽。そこはまさに神の秘湯だった。

眼前に広がる岩風呂の湯船——奥の巨石からは熱々の温泉が滝のように流れ落ちており、湧き出る細やかな泡と、立ち昇るふんわりとした湯気が格別な風情を醸し出していた。話によると、薬効もかなりあるらしい。この湯に浸かりながら見上げる月はさぞかし最高だろう。少年も何度か利用したことがあるが、たしかに感動的だった。彼は思い出しながら水質検査機を水面に落とし込む。

「……よし、特に異常はないな」

確認し、彼はようやく湯殿をあとにした。

メモ帳を確認し、急いで次の仕事場へと移動する。

が、脱衣所を出たところで、彼はワツと驚き足をとめてしまう。

なぜなら、謎の黒い煙が少年の方へと押し掛かるように向かってきたのだ。少年はとっさに

火事を連想してその表情を強張らせたが、どうもようすがおかしかった。黒煙は縦横へと拡散せず、少年の前でやまなりになった状態のまま停滞しているのである。そこでよくよく観察してみると、黒煙の輪郭はどこか人間のかたちに似ており、その山のちようどてっぺんのところには赤く光る丸いおめめがふたつ、ちよこんと並んでいるではないか。瞬間、少年は理解した。

彼は瞽女の宿にたどり着いた宿泊客なのだ。

その挙動からして少年になにやら伝えたいことがあるようだが、残念ながら言語というものがまったく通じなかった。これは誰かほかのひとを呼んできた方がよさそうである。と、彼が思ったそのやさき、どこからともなく幽玄とした青白い鬼火が出現し、ゆらゆらとこちらに向かってきた。

「ああ、絶<sup>ゼツ</sup>さん。実はこの方が——」

「……………」

鬼火は少年の言いたいことを察したのか、黒煙のまわりをくるくると旋回しはじめた。次いで、ふたりはじつと見つめ合ったかと思うと、意思の疎通がとれたのか、黒煙は鬼火に誘導されるように屋敷の通路を引き返していくのであった。そのうしろ姿を眺めながら、少年がほと胸をなでおろす。

あの鬼火は宿に住まう瞽女さんの魂であり、その名を絶<sup>ゼツ</sup>という。瞽女というのはかつて村々

をまわりながら楽器を演奏し、唄を披露していた盲目の女芸能者たちのことだ。彼女はデラの屋敷に古くから住みついており、屋敷のなかで迷子になっていたりすると、どこからともなく出現し導いてくれる不思議な存在だった。なお、瞽女の宿に住みついていて瞽女の魂は絶さんだけではない。

「さて、仕事に戻るかな」

そう言つて、少年はその場をあとにする。

それから、彼はいろいろな雑務をこなしていった。

無限廻廊の雑巾がけをし、螺旋階段のろうそくに火を灯し、学術書庫の本棚を整理してから業務日誌を記入する。巨大な屋敷のなかを奔走するのは体力を必要とするが、瞽女の宿の不可思議な構造に少年は興味津々であつたため、それほどつらくはなかつた。彼はまた眼球職人の弟子として魔術工房への出入りも許可されており、地下深くにある第三魔術工房だけは現在封鎖中なので入れないが、第一と第二魔術工房には自由に入ることができた。とはいえ、やれることはデラさんが行う魔術儀式の助手を務める以外では、古今東西から収集した魔術材料の補充作業や実験器具の手入れなどがほとんどで、あとはときどき大型魔導装置のメンテナンスを手伝つたりすることぐらいである。

少年は眼球職人からいろいろな魔術知識を教わるかたわら、学術書庫から持ち出した図鑑を片手に、この工房内に収められた貴重な鉱物から精製した石薬の効能を調べたり、またピンに

入った透明骨格標本の謎生物を確認したりと、自発的な勉学に勤しんでいた。そしてそれらにひと区切りがつくと、彼はやっと自室に戻るのだった。

※※※

彼が机に向き合い、その目を閉じる。

机の上には大量の魔術書や歴史書、それに神話集や博物誌といったものが高く積み上げられており、いまにもバランスを崩して倒れそうになっていた。なかにはページがひらかれた状態のものもある。これらはすべて魔術の知識とそれを支える想像力を育むための教材だった。少年には難しく理解できない部分も多かったが、とりあえずは分かるところからすこしずつ読み進めている。しかしながら、ここで注目すべきはその書物の山に囲まれている銀色の美麗な物体だろう。

神秘的な銀光を放つそれは少年がデラから授かった弟子の証だ。

手のひらサイズの大きさで、普段は柱状の形態だが持ち主の意志により自在に形状を変化させる特性がある。デラさんが持つ銀飾のスプーン【シルヴィア】と同じ素材で造られた強力な魔術合金らしい。説明によれば、まだ名前はつけてはいけなかったことだった。その呼び名は持ち主の力量が上がり、またこの魔術合金にその存在を認められたときになってはじめて与え

る権利を得られるとのことだった。そしてその瞬間、魔術合金はあるべき姿にみずから収束するのだという。そう、彼女のスプーンのように。それゆえ、彼は言われたとおりの一人前の魔術師として認められるまではこの魔術合金のことを学術名である【フェザメル・ストーン】と呼んでいた。

少年がその魔術合金フェザメルストーンに手をかざし、両目をひらく。

そして呼吸をゆっくりと吐き出しながら指先に神経を集中させていった。すると、魔術合金が静かに浮き上がり、その滑らかな表面を波打たせはじめる。次いで、少年がかざした両手を左右にひらいていくと、魔術合金もまたその動きに合わせてかたちを変え、左右に細長く伸びていった。彼はある程度まで合金が伸びるとそこでまた手の動きをとめ、今度は両手のあいだをせめていく。言わずもがな、魔術合金もまたその形状へと戻っていった。これを何度も何度も繰り返していると、やがて少年の腕が震え出し、こめかみから汗がたらたらと流れ落ちていく。そしてそれが机の上ではじけた瞬間、魔術合金もまた限界を迎えて千切れてしまうのだった。

少年が乱れた呼吸を整え、視線を落とす。

見れば、机の上に落ちたふたつの魔術合金がうねうねと流動していた。それらは磁石のように引き合いながらくっつくくと、すぐに合体して混ざり合い、あつというまにもとの美しい銀色の塊に戻っていく。

「ふう、一応、新記録だな」

少年は汗をぬぐってつぶやいた。

彼はここにきてから毎晩この練習をしている。

この魔術合金を自由自在に操れるようになることが当面の目標だった。少年はまだ棒状にしたり、または球形や四角形などの簡単なかたちしかつくれないが、いずれは師であるデラさんみたいに、細部の装飾にまでこだわった瀟洒しょうしゃな剣や盾、そして伸縮自在の鞭といった複雑な造形をつくれるよう日々努力を重ねている。とはいえ、それはやはり容易なことではなく、少年はなかなか先へと進めずにいた。最初の一か月ほどは調子がよく、彼も棒や玉をつくって得意になっていったのだが、それからはずいぶん思うようにいかなかった。本来であればこれだけでも十分に驚くべきことなのだが、すべり出しがよかつただけに焦りも壁もはやく訪れていたのだ。

大事なのは想像力。

つくりたいかたちをどれだけ正確にイメージできるかが鍵であり、そうすれば、魔術合金がそれを読み取り自動的に形にしてくれる。が、理屈でわかっているても実際にできるかどうかは別である。

少年は難しい顔で頭をかくと、気持ちを切り替え次の練習に移った。

「よし、お次は……」

そうやって、彼は魔術合金をにぎり直した。そして先と同じ要領で合金に自分のイメージを伝える。

と、今度は一瞬にして合金が棒状に変化する。

手をかざすよりもにぎっていたときの方がイメージが伝わりやすいのか、変化の速度は段違いだった。先の集中力を要する練習に比べるといくぶん簡単そうに見えるが、瞬間的な技術のためイメージが伝えきれず不発に終わったり、または目測を誤って長さや強度に狂いが出てしまうことも多い。事実、伸ばした棒がイメージをはるかに超えて伸びてしまい、机と隣接していた壁を突き破ってしまったこともあった。デラさんが失敗の記念として残しておけと言ったのでそのままにしてあるが、たしかに目につくところに失敗のあとが残っていると、自分に対するよい戒めになる。

彼は失敗の痕跡を見ながら何度も伸ばして、縮めて、と繰り返した。

あるときは右手だけで。その次は左手だけで。

何度も何度も、基本動作を繰り返す。

そうして練習を続けていると、ふと少年の動きがとまる。彼の視線は魔術合金の棒——つま

フェザメルロッド

り魔術棒にあった。彼が椅子から立ち上がり、魔術棒をかまえたかと思うや否や、それをくるくると回しはじめる。棒術はまだデラさんから教わっていないのだが、棒を持つとなぜだか振り回したくなるのは男の性というものだろう。彼はしばしデラになったつもりでデタラメな

演武を続けていた。

が、そのとき、机の上の電話機がベルの音を鳴らし出す。

驚いた少年はビクツとからだをのけぞらせ、手もとを狂わせてしまう。手から離れた魔術棒が制御を失い、勢いよく山積みの書物へと激突する。と、それにあせった少年が今度は足を滑らせ、ドタドタと騒がしい音を響かせながら書物の雪崩と一緒にその場へと倒れ込んでしまうのだった。

ベルの音はなおも少年を呼び続けている。

少年は覆い被さってきた本の山を払いながら机の上に手を伸ばした。

そして受話器をつかみ、せきばらいをはさんで尋ねる。

「——デラさん、なにか御用ですか？」

ゴシック調のおしゃれな扉の前に立ち、少年は気を引き締めていた。

扉には眼球を想起させる複雑な紋様が彫り込まれており、その溝のあいだを紫水晶色の不思議な光がゆっくりと流れていた。また見上げれば、扉の上に高級そうなドアプレートが飾られていて、そこに部屋の主の名が美しい書体で刻まれている。扉を叩くと、部屋の中からすぐに声が返ってきた。

「ぼくです。おじゃまします——」

そう言って、少年は彼女の部屋に入った。

瞬間、彼の鼻孔を甘い匂いがくすぐってくる。

とても良い香りだった。意識をしびれさせるような、神秘的で、じんと温かい香りだ。部屋の内装もまたその香りに劣らぬ妖麗なデザインで、黒を基調としたダークな魔女の怪しさのなかに鮮やかな寶石が華麗にきらめく独特の雰囲気をもっている。格調高い調度品や部屋の奥にある天蓋つきの大きなベッドなどがそのいい例だ。天蓋からならぬに薄いついてきたカーテンがなんとも雅やかである。

そんな芸術的な寝室の中央に、彼女は座っていた。

創世の大魔術師こと眼球職人デラである。

女神と見まがうその美貌はまさに絶世の美女さながらの存在感だった。

彼女はカラス羽色のワンピースに身を包み、豊満かつしなやかな肉体を椅子の上にそっとのせていた。彼女の長い髪の毛はまるで紫水晶アメジストをほどこいたかのように繊細かつ艶やかながやきを放ち、そしてそのまつげのしたには紫水晶そのものと言ってもよいほどの美しき瞳がはまっている。彼女はアンティーク調の丸いテーブルでお茶をしており、少年と目が合うと朗らかに微笑してみせた。

「やあ、いきなり呼び出してすまないね」

「いえ、かまいませんよ」

少年が近づくと、彼女が銀飾のスプーンでテーブルをコツンと叩く。

すると、少年の前にあつた椅子がひとりでに引き出された。彼は驚きもせずその椅子に腰をかける。

見れば、彼女のそばには複雑な曲線を描くケージスタンドが立っており、その先端に真っ黒な鳥かごが吊り下げられていた。それは城と監獄を足したような怪しい外観で、内部のようすを見るのができない不思議な構造になっている。そんな鳥かごの主こそ、少年のよき先輩であり、またよき友人だった。鳥かごの中からしゃがれた声が響いてくる。

「おつかれさん」

「やあ、オンボロバード」

「調子はどうだ？　ちゃんと飯は食ってんのか？」

「ちゃんと食べてるよ。デラさんの手料理は美味しいからね」

それはお世辞などではなかった。眼球職人デラがこしらえる料理は疲労回復と魔力増進の効果を秘めた特別な料理なのである。食べればからだの毒素が抜け、力がみなぎってくる。味もまた絶品だ。聞くところによると、彼女が書いたレシピは裏の世界においてかなりの高額で取引されることもあるらしい。

「さ、ミルクティーをどうぞ。お菓子も自由に食べてくれ」

「すいません、いただきます」

促され、少年はティーカップに口をつける。

目の前にはビスコッティやチョコレートなどの美味しそうなお菓子が脚のついたガラス皿の上で綺麗に並べられていた。彼はすぐに手を出すのも無作法かと思いい、ほんの一瞬ためらったが、やはり我慢できずにそのうちのひとつをひよいとつまみ上げ、口の中に放りこむ。と、そのとろけるような味わいに思わずほほを緩ませてしまうのだった。そんな少年を見て、デラがクスクスと微笑する。

少年はハツとして照れ笑いを浮かべ、言った。

「それで、僕になにか御用でしょうか？」

「実は明日、ロスフォレスト地方の山岳地帯でアニメマーケット獣人市場がひらかれるんだ」

「獣人市場？」

聞き慣れぬその言葉に、少年が首をかしげる。

続く彼女の話によれば、それは読んで字のごとく、獣人たちによって行われる秘密の市場とことだった。獣人市場は世界の各地で行われていて、それぞれの地域で独自の日程に基づき開催されているらしい。辿りつくのはたいへんだが、そこでは隠れ里に住む獣人ならではの珍品や名品が売られており、良質な魔術材料になる素材も多いため、魔術をかじる者ならば一度は足を運んでみるべき場所なのだという。その魅力的な市場が明日、国境を越えたさきにある濃密な森に囲まれた山岳地帯で開催されるといふのだ。

「へえ、獣人市場なんてものがあるんですね」

「市場とは言ってるが、半分ぐらいお祭りみてえなもんさ」

「仕事の息抜きもかねて楽しんでくるといいよ」

「デラさんは行かないんですか？」

「残念だが、わたしはちよつと用事があつてね。一緒には行けないんだ」

「それじゃあ、まさか……ぼくひとりつてことでしょうか？」

「いやまさか、引率はテティに頼んであるよ」

「ああ、そうでしたか」

と、少年がホツと胸をなでおろす。

彼女は警女の宿に入っている酒場【オッド・アイ】のバーテンダーで、オンボロバードほどではないが、警女の宿において、少年が気軽に声をかけられる住人のひとりである。雰囲気のある酒場のため、未成年である少年が利用することはあまりないが、たまにお客さんがいないときにのぞいたりすると、美味しいジュースやデザートなどをこちそうしてくれるのだ。それに酒場では軽食も扱っているのです、デラさんが不在の日などはそこでごはんを食べることもある。彼女の料理の腕もまたデラさんに負けず劣らず一流だった。デラさん曰く、彼女は酒場ですすメニューの仕入れ先として獣人市場をよく利用しており、明日もちょうど買い出しに行くところだったらしい。

「かなり歩くからな、今日は早めに寝とけ」

「きつといい刺激になるよ。広い世界を見てきなさい」

「はい、わかりました」

少年が深くうなづき、返事をする。

それから、少年はお菓子をつまみながらすこしのあいだ彼女らと談笑していたが、やがて時計の夜を告げる音が部屋に響くと、オンボロバードの助言に従い自室へと引き返した。本音を言えばまだまだ話していたかったのだが、そこはやはりこどもでもある。彼のあたまはすでにおやすみモードに入っていた。彼は睡魔に引きずられながらベッドに倒れ込むと、すぐに寝息を立てはじめるのだった。

※※※

翌日早朝、少年は瞽女の宿のとある一室にいた。

そこは少し古ぼけた部屋で、どことなく物寂しいというか、懐古趣味を思わせる質素な雰囲気か漂っていた。見れば、床には白と黒の四角いタイルが交互に敷き詰められており、また周囲の壁にはいくつもの古美術的な大きい鏡が掛けられている。そしてそんな部屋の奥に、これまたレトロチックな回転扉が設置されているのだった。回転扉の上には真鍮でつくったオシヤ

レな装飾品が施されていて、そこには「ハロー・ワールド」と書かれている。扉の中が気になるところだが、回転扉の入り口には黒いオペラカーテンが垂れ下がっており、残念ながらその奥は見えなかった。

「この部屋で間違いないはずんだけど……」

出発の時間と集合場所はここのはずだったが、部屋には自分しかいなかった。とはいえ、出発時刻までまだ五分ほどあるのでそう気にすることもあるまい。と、はじめてくる不思議な場所に心細さを感じながら時間をつぶそうとする少年だったが、そのとき、ふいにうしろから声をかけられる。

「おはようございます」

「ああ、テイさん、おはようございます」

振り向くと、少年の背後に獣耳を生やした女性が立っていた。

彼女が今日の引率を務めるテイさんである。彼女はいつものバーテンダー姿ではなく、少年と似たような全身を覆うブラウンのマントを着込んでいた。その地味な出で立ちは一見すると平凡な村娘のようだったが、しかしよく見れば、やはり彼女の凛とした美貌は隠しきれてはいなかった。彼女の緋色のミディアムヘアとふたつの瞳はその冷静沈着な性格に反して炎のように煌めいてる。

「昨夜はよく眠れましたか？」

「ええ、ぐつすりです。それより、この部屋は？」

「百聞は一見に如かず。それではさっそく出発しましょう」

彼女はそう言うと、部屋の奥にある謎の回転扉へと歩いていった。そしてその入り口に設置されていた古めかしいレジスターのような物体の前に立つと、そこに並ぶボタンのひとつを押し、よこに取りつけられたレバーを引く。するとその瞬間、機械の窓枠に表示されていた数字がぐるぐると回り出し、ガシヤンガシヤンと左から順に止まっていくではないか。叩き出された数字の羅列はおそらく地図上の座標だろう。数字の下にはロスフォレスト地方の表示が出ていた。それから、機械は下にあいた平たい穴から紙を二枚、吐き出す。どうやらこれは発券機らしい。

「さあ、一枚どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

テティが少年にチケットを渡し、オペラカーテンの中に入っていく。

と、少年もまた回転扉の中へと足を踏み入れた。

そこは異様な空間だった。なぜなら、入り口の向かい側に出口がないのだ。これではどれだけ進もうと、回転木馬のように同じところをぐるぐるとまわるだけである。おまけに四方の壁には入り口と同じような黒いオペラカーテンが垂れ下がっていて視界が悪く、この狭い円筒形の箱の内部はまるで小さな見世物小屋のようであった。これでいったいどうしようというのだ

ろうか。

少年がとなりのテティを見やる。

すると、彼女は誰に言うでもなく美声を鳴らした。

「——ジュリエッタ」

刹那、彼女の呼びかけに回転扉が反応する。

開幕ベルのような音が響いたかと思うと、背にしていた入り口に扉が下りはじめ、それと同時に垂れ下がっていたオペラカーテンがするすると上がっていったのだ。カーテンの奥には等間隔にスリットが入った黒い壁があり、その黒い壁のうしろにはまた別の白い壁が設置されている。特筆すべきは、その黒い壁に入ったスリットからのぞくうしろの白い壁面には黒いバレリーナのシルエットがたくさん描かれていたことだろう。バレリーナのシルエットはひとコマごとに連続的な動作をしており、どうやら一周まわるともとの絵柄に戻るように構成されているらしい。

少年が戸惑っていると、回転扉はさらなる異変を彼に見せはじめた。

黒と白の二枚の壁がそれぞれ自動的に動き出したのである。

それはとても不思議な光景だった。

スリットからのぞくバレリーナはひとコマごとに動いていくため、少年らのまわりを踊っているかのように見えていた。おまけに、回転扉の内部では外壁の回転に合わせて白光が点滅し

ており、白、黒、白、黒と高速で繰り返し返されているものだから、残像効果によって彼女の舞踏がいつそうリアルに見えてくる。回転のスピードが速くなるとそれはいよいよ滑らかなものに変化して、少年の視界を幻惑しはじめていた。

「回転ゾートのぞき絵ロートを応用した錯覚の一種ですね」

「……ゾート……ロート……」

少年がぼそっとつぶやく。

彼の頭はくらんでいた。激しく切り替わる明暗と、自分のまわりで踊るバレリーナたち、このふたつの視覚効果が彼の理性に揺さぶりをかけていた。気づけば、バレリーナのダンスに合わせてオルゴールが流れ出している。その無邪気に澄んだ音色もまた、彼の眩暈めまいに拍車をかけていた。そうこうしているうちに、これは幻覚だろうか、それとも魔術の類か、バレリーナのシルエットがスリットからひよいと抜け出し、少年の目の前にまで踊り出てきたのだ。そして彼女たちが両手を優雅にしならせ、いつせいにお辞儀レヴェンシスをする――。

その瞬間、少年は回転扉を抜け出していた。

「……………」

「……………」

「……………」

彼は数秒のあいだ、言葉というものを失っていた。

が、やがてハツとして我に返ると、眼前に広がるその光景に思わず声をかすれさせてしまうのだった。いつのまにか、彼は鬱蒼と生い茂る樹林帯のなかに移動していたのだ。そこは彼の知っている森とはまったく異なる植生が深い緑を成しており、随所に見られる地面と一体化した雄々しい岩石などは、まさに山岳地帯ならではの峻烈な自然観を以て少年の感性を刺激していた。

「大丈夫ですか？」

「え？ あつ、はい……」

テティに問われ、少年が反射的に返事をする。

しかし実際のところ、あまり大丈夫とは言えなかった。彼は回転扉の幻視仕掛けに翻弄されてしまったらしく、ふらふらになっていた。一歩前に踏み出そうとしただけでよろめいてしまい、そのまま近くにあった岩の上に腰を落としてしまうありさまだ。よく覚えていないが、どうやらテティが彼の手を引く張って回転扉のなかを歩いてくれたらしい。少年はひたひたに手をあて、恥ずかしそうに言った。

「すいません、ちょっと酔ってしまったみたいですから……」

「転移魔法の類は慣れるまで負担が大きいですから、仕方ありません。すこし休んでから行きましょう」

そう言つて、彼女は別の岩の上に腰をかけた。

そのさい聞いた話だが、あの回転扉は魔術と科学を組み合わせた長距離用の空間転移装置らしい。ただ、どこにでも移動できるわけではなく、あらかじめ設定してある地点にしか行けないとのことだった。今回のケースについて言えば、獣人市場の開催場所に一番近い地点がこの樹林の一角だったというわけだ。驚天動地のとんでも装置だが、よくよく考えてみれば、デラさんはちよくちよく空間を飛び超えてくることがあるため、これは瞽女の宿にあつて当然のテクノロジーだろう。

と、そんなことを考えているうちに、気づけば、彼の転移酔いもだいぶ落ち着きはじめていた。彼は三回ほど深呼吸を繰り返すと、座っていた岩の上から立ち上がり、獣人市場を目指して歩き出すのだった。

歩いて、歩いて、歩き続けることいくばくか。

少年は胸をときめかせながらジャングルじみた森のなかを進んでいく。

好奇心とは馬鹿にできないもので、彼はそのとき、疲労感さえ忘れてまわりの風景に夢中になっていた。岩石に付着するコケに、その上を這う虫やトカゲたち、また樹葉のざわめきのあいだを飛ぶカラフルな鳥やその鳴き声に至るまで、すべてがすべて初めて遭遇する新鮮さに満ちている。

となりあつてはいても、ここはやはり異国なのだ。と、少年は感慨深い思いを胸に樹林の奥

へと足を運んでいった。

緑樹が濃密さを強め、道が険しさ増していく。

さすがは獣人市場への経路である。人間の貧弱な足では簡単に辿り着けないようにしてあるらしい。優秀な案内役がいなければ、少年もとつくに遭難し、行き倒れていただろう。テティは少年のためにすこしでも歩きやすい道を選び、先導してくれていた。彼女の身体能力はやはり人間のそれではなく、土壁の段差を苦もなく登っていったり、また小さな岩を足場にテンポよく小川を渡っていったりと、その身軽さは実に驚異的なものだった。少年はそんな彼女をお手本に、転びそうになったり、落ちそうになったりしながら必死になってついていく。と、やがてテティがその歩みを止めた。次いで視界に入ってきた馬鹿でかい岩壁に、少年は思わずノドを鳴らすのだった。

大地に君臨する大自然の玉座とでも表現しようか。

巨大な台形型の岩山が、緑を突き抜け大空へと駆け上がっていたのだ。天頂付近には深い霧がかかっており、ある種の神聖さのようなものさえ漂っている。岩山から放たれる威厳が肌に伝わり、少年はからだを震わせていた。果てしない頂を呆然と見上げながら、彼はとなりのテティに尋ねる。

「これを……登るんですよね？」

「ええ、もちろん」

そうやって、テティは岩壁ぞいに歩き出した。

すると、すこし行ったところに荷馬車がすれ違える程度の山道が現れる。その道は螺旋を描くようにして岩山の周囲に刻まれており、どうやら頂上へと続いているようだった。見たところ、なかなかの悪路である。外壁はあるにはあるが、転落防止の機能はあまり期待できそうにない。また凹凸の激しい岩肌は登るのにかなり足腰を必要とするだろう。少年は自分のほほを両手ではたき、気合を入れた。

登りはじめてからどれくらいが経過したのだろうか。

景色はいっこうに変わる気配を見せず、目の前には同じような道が延々と続いていた。まだ先は長そうである。少年はひたいから流れ出る汗をぬぐい、懸命に二本の足を動かし続けていた。すると、先の方でなにやらガラガラと妙な音が響いてくる。少年は顔を上げ、音の正体を確認した。

——荷車だ。

見れば、その車体にはツボや刀剣などさまざまなものが積まれていた。布とロープで荷台に固定されていることから察するに、市場で売るための商品だろう。車を引いているのはロバに似た見たこともない動物で、動きこそ遅いが、円錐形の野太い四肢は力強く、峻厳な山道を屁ともせず着実に進んでいた。速度においてわずかに勝っていた少年らが、山腹のここにおいて

追いついてしまったらしい。

ふたりは自然と荷車のよこを通っていくかたちになる。

そのさい、少年はフードのかげから彼らのことをひそかに観察していた。

彼らとは、つまり獣人のことである。ひとりとは前述したロバ似の生物にまたがっており、それとは別に荷車の両側にもひとりずつ仕えていた。三人とも少年らと同じようなマントを着込んでおり、その顔をフードの奥に隠している。彼らの姿は一見してただの行商人のようだったが、フードの暗がりからちらりとのぞくその瞳は人間のものよりはるかに鋭かった。うつむき加減なのはおそらくその長い鼻梁を隠すためだろう。少年は荷車を追い抜くと、小さな声でティに話しかけた。

「なんだか、姿を見せたくないって感じですね……」

「獣人はヒトに見られるのを嫌いますから」

彼女のその言葉はフードのなかで重く、静かに響いた。

考えてみれば、獣人は人間という種の繁栄の過程でその多くが居場所を追われたのだ。要するに彼らは追放者であり、素性を隠そうとして当然なのである。だからこそ、外出するときには全身を覆うような服装になるのだろう。もし人間に見つかれば、あまりいい結果にならないことは明白だ。彼らは人間を敵視し、人間もまたおとぎ話になりつつある彼らの存在を怪物視しているのだから。

と、そこで少年がはたと気づく。

「あの、それじゃあ獣人市場にぼくがいたらまずいんじゃない……」

「心配せずとも大丈夫ですよ。人間がまったくくないわけじゃありませんから」

「え？ そうなんですか？」

「オーナーも言っていました。獣人市場は魔術材料の宝庫ですので、魔術を嗜むたしなその道のプロやコレクターたちが材料調達の目的でこつそりきていたりもするんです。ほとんどの獣人たちもそれを承知の上でやっていますので、お客さんという立場であればそれほど問題はないかと思えます」

「そうなんです。よかったです……」

「とはいえ、悪い奴も当然いるのでフードと帽子はとらない方が無難ですね」  
言われて、少年は今一度フードと帽子を目深にかぶりなおした。

岩山の頂上についたとき、少年はへとへとだった。

何度くじけそうになったことか。最後の方はもう足に鉛をつけられているのではないかと疑うほどであった。テイがそんな少年を心配して「背負いましよるか？」と訊いてきたときは思わず誘惑に負けそうになったが、それでも、少年は最後まで自分の足で登りきった。いわゆる、男の意地というやつである。しかしその苦労のおかげで、彼はいま未曾有の大感動に打ち

震えているのだった。

——眼下に広がる野生の世界。

それは地平線を埋め尽くす猛々しい大自然の塊だった。

黒々とした樹海が広大無辺にあふれ返り、そのなかを、巨大な岩山が槍のごとく何本もそびえ立っていた。この地方が有する激しい雨と太陽の力が繰り返された結果、こうした雄大な自然観ができあがったのだろう。少年のいた地方も割と自然は豊かな方だったが、どちらかと言えば素朴でのどかな印象であり、このような雄々しさとはかけ離れていた。そしてまた、そんな色濃い緑の中央に陣取るこの岩山は自然による浸食もとりわけ激しく、頂がえぐり取られたかのように大きく陥没しており、その廃墟感の漂う複雑怪奇な地形はさながら滅びた円形闘技場か、もしくは屋根が崩落した天然要塞のようであった。見れば、岩壁には窓のような風穴がいくつもひらき、内部の岩肌は削れ、階段状に連なる路や入り組んだ樹木たちが一面に根を巡らしている。

少年はその一角に呆然と佇んでいた。

現実味を欠いた奇岩の群れに、血が、ざわめきを覚えている。

が、くり抜かれた山の内側ではさらに驚くべき光景が展開されていた。少年がその目を見ひらき、声を震わせる。

「すごい……これが……アニマーケット……」

視線の先には、異国情緒あふれる屋台や露店が立ち並んでいた。

岩山のとっぺんゆえに空を遮るものは何もなかったが、随所に建てられた柱と柱のあいだにロープが縦横無尽に結われており、そこに赤、青、緑などなど、色とりどりの奇怪なランタンがたくさん吊り下げられていた。そしてそのぼんやりと仄めく幻想的な灯の下で、多種多様な獣人たちがわいわいと賑わっているのだ。彼らはみな異民風の衣服を身にまとい、屋台と露店のあいだを二足歩行で歩いている。なかには装飾の凝らされた怪しげな仮面をかぶっている者もちらほらと見られた。彼らのその奇異な風貌と、またどこからか聞こえてくる民族調の軽快な音楽はまさに異境の秘祭といった様相で、華美で雑多な獣人市場をさらに呪術的な雰囲気で彩っている。

まるで、絵本の世界だった。

獣たちが人語を解し、お金のやりとりをしているのだ。

初めて見る異種族の姿に、少年は眩暈にも似た衝撃を受けていた。

知識としては知っていたが、いざ実物が目の前に現れるとなると、やはり驚かずにはいられない。

彼らが獣の肉体を持ちながら人間さながらの文化性を呈している光景は実に摩訶不思議なものだった。しかし、それこそ偏見というものだろう。彼らは生存競争を賢く生きのびた一種族なのである。獣の顔をしているからといって、その知性は侮れない。むしろ少年よりもよほど

世を知る知恵者たちなのだ。

と、市場から威勢のよい声が響いてくる。

「竜の骨だよ！ 削れば剣に、砕けば薬だ。さあ、買った、買った！」

「そこのお嬢さん、当店オリジナルの香料はどうでしょう？」

「ナナカマドの枝で編んだお守りだ。安くしとくよ」

「新鮮なマンドラゴラはいかがかね」

客引きたちの言葉はとても興味深いものだった。道ゆく獣人たちの足がとまり、店先をのぞき込む。無論、少年もまた興味をそそられずにはいられなかった。対して、テティはさすがに慣れたようすで表情ひとつ崩さない。彼女は獣人市場の入り口である樹壁の門を抜けると、そのまま奥の方へと進んでいった。少年はそんな彼女のうしろにくつつき、いよいよ獣人市場に足を踏み入れるのだった。

—— 獣人市場。

それは聞きしに勝る不思議な場所だった。

右を向けば見たこともない木の実や果物が売られており、また左を向けば珍しい薬草や毒草が売られていた。そのほかイモリの黒焼きやガマの油、鮮やかな花々に黄金色の蜂蜜といった代物から、いかにもやばそうな芸術性の高いキノコなどさまざまなものがある。な

かには書物や染料を取り扱っている出店もあった。どこを見ても刺激的なものばかりで、少年は首を休ませる暇がない。

と、そんな彼の視線がまた何かを捉える。

見れば、少し行つたところの地面に黒い布が広げられており、その上に小さな石がきれいに並べられていた。一見するとただの石なのだが、よくよく観察してみると、石のなかに美しい微細なきらめきがある。どうやら特殊な宝石の原石らしい。また、その石売りのとりには古めかしい時計屋があり、機械時計から砂時計に水時計など一風変わったものまでいろいろな時計が置かれていた。店主は眼鏡をかけた老ウサギの獣人で、店の奥に座りながら黙々と懐中時計を分解している。

どこもかしこも獣人だらけ。

此処には少年の知らない世界が広がっていた。

外では顔を隠して生きている彼らも、この日この場所においてはいくらか開放的になるようだ。お面をつけた者でさえ、ひと目見ればそれが人間でないことはよく分かる。隠れているのは目もとや口もとなどの部分的なところばかりで、彼らが有する牙やまなじりはむしろ誇張されてさえいる。むしろ、正体を隠さなければならぬのは人間の方だった。少年しかり、正体がバレないようマントを着込み、フードを目深にかぶらなければならぬ。獣人たちのなかでときどきそういうった姿の者を見かけるが、もしかしたら、獣人市場の珍品を求めてやってきた業界

人なのかもしれない。

などと考えながら市場を歩いていた少年だったが、彼は角を曲がったところでふとその足をとめた。

近くで獣人たちによる演奏会が開かれていたのだ。

彼らはギターやマリンバ、クラリネットなどの様々な楽器を巧みに使いこなし、激しく叙情的なジプシーメロディーを奏でていた。そしてその曲に合わせて、三人の踊り子たちがタンバリンを打ちながら情熱的な舞踏を披露しているのである。彼女たちの衣装は宝石とカラフルな布で織りなされ、舞うたびに美々しくはためいていた。その見事な旋律と演舞に、少年は思わず聴き入ってしまう。

「なかなかのものでしょう？」

「ええ、すごいですね。感動すら覚えますよ」

テティに訊かれて、少年は答えた。

獣人はその見た目から身体能力において抜きん出ているというイメージだったが、先の時計屋といい、この音楽集団といい、彼らの手先の器用さや芸術性もなかなかどうして馬鹿にできなかつた。むしろ、人間よりも芸達者かもしれない。彼は鮮やかな宙返りをきめる獣の踊り子たちを見ながら、見物客と一緒に打っていた。と、そんな彼を見て、テティがある提案を持ちかける。

「わたしは買い物をしてきますが、あなたはどうか？」

「そうですね……できたら、いろんなところを見てまわりたいなあ……」

「わかりました。では、またあとで落ち合いますよ」

「いいんですか？　ありがとうございます！」

少年がバツと両目をかがやかせる。と、ふたりは待ち合わせ場所と集合時間を決めて分かれた。

それから、少年はしばしのあいだ獣人楽団の遊芸を堪能していたが、やがてその演目にひと段落がつき、見物していた獣人たちがお金を投げ始めると、彼もまたいくらかのお金を同じように投げ渡してその場をあとにした。最後まで見たいという気持ちもあったが、ほかのお店も見てまわりたいかったのだ。残された自由時間を考えると、そろそろ別の場所へと向かった方がいいだろう。

彼はそう考え、市場の奥に足を向けた。

獣人市場には本当にいろいろなお店が出ている。

歩いていると、暴君ヒツジの綿菓子店にオオカミ紳士の射的小屋、また和ギツネ面の煙草売りなどなど、多種多様な出店が彼の目にとび込んでくる。そのどれもが奇々怪々として刺激的だった。しかも、周囲は大きな絶壁に囲まれており、光の遮られたこの場所はまだ夜でもない

のに薄暗い。一方で、ランタンの灯はゆらゆらと誘蛾灯のようにまたたき続け、少年の足取りを順々に絡めとっていく。そんな幻覚めいた場所をひとりで散策しているものだから、少年はいつしか異世界に迷い込んだような不思議な気分になっていた。彼は不安と好奇心を抱きながら、果てなき夢の市場をこそそそと巡っていく。奇妙な市場は一階だけではない。岩壁に連なる岩の階段や樹木のはしごを登ってゆけば、そこにはまだまだミステリアスなお店が看板を掲げているのだ。

と、そのとき、彼はふいに何者かによって呼びとめられた。

「坊ちゃん、坊ちゃん、おーい、その坊ちゃん」

野太い声に、少年が振り返る。

声の主はすぐに分かった。見ると、近くに顔の赤い白ひげの大ダヌキがゴザの上にドデンと座っていたのだ。そのとなりには老舗風の天幕が張られており、なかには三つほどのこれまた大きな茶色いかめが置かれている。かめには透明な液体が満ちていて、鼻をくすぐる甘ったるい香りを漂わせていた。大ダヌキのやたらと上機嫌なようすからして、それらは間違いないお酒だろう。大ダヌキはでっぷりとした腹をぼんぼんと叩きながら、なおも少年を呼び込んでいる。

「坊ちゃん、坊ちゃん、一杯どうじゃ？」

「あの、ぼくまだ未成年なんでお酒はちよつと……」

「まあまあ、遠慮はいらん。タダでいいから、飲んでみい」

「いえ、遠慮というわけじゃ——」

少年は断り続けたが、大ダヌキの誘いはしつこかった。

完全に酔っぱらっており、話がまるで通じないのだ。しまいには、大ダヌキが柄杓を取り出し、盃にお酒を注ぎ込んで少年へとぐいぐい勧めてくる始末である。その強引さに少年はだんだんと逃げ場を失ってゆき、ついには「じゃあ、ひとくちだけ」と盃に口をつけた。瞬間、のどがカッと熱くなり、少年の視界がぐわんぐわんと回り出す。味覚感覚のつもりだったが、獣人のお酒は思っていた以上に強烈だった。そんな少年を見て、大ダヌキはまた豪快に笑い声を上げ、お酒をぐびぐびと飲みはじめた。少年はくらむ頭を押さえてその場から逃げるように離れるのだった。

まったく、たいへんな目にあつてしまった。

少年が頬に手を当て、ため息を吐く。

お酒のせいで、頭がすこしぼうつとしていた。どうやら、自分はまだあまりお酒に強くはないらしい。少年がちよつとばかり休憩しようとすみの岩場に腰を落とす。そして獣人市場の妖しくも美しい禁秘的な情景を静かに眺めていたのだが、そこでまた、彼は何者かに呼びとめられるのだった。

「ちよいと、そこのお兄さん」

「こつちだよ、ほらほら、こつち、こつち」

今度は可愛らしい女性の声だった。

声をたどっていくと、少年は岩場のうしろで一匹の黒猫が手まねきしながら座っているのを発見した。彼女もまた獣人市場の出店者らしく、地面に赤い絨毯を敷いており、見れば、その上で小箱がきれいに並べられていた。先のこともあり、少年はすこしばかり警戒していたのだが、お酒で足が軽くなっていたこともあつたせいか、結局、彼は彼女の呼びかけに応えることにしたのだった。そうして絨毯の前で屈み込むと、黒猫は自分の手をペロペロとなめながら彼に尋ねた。

「お兄さん、顔が赤いけど、大丈夫かい？」

「ええ、実はちよつと、お酒を飲んでしまつて……」

「もしかして、向こう側の大ダヌキに捕まつちやつた？」

「そうなんです。それで強引に……」

「ああ、やつぱり。あそこの大将、誰かれかまわず飲ませたがるのさ」

そう言つて、彼女はやれやれと首をふる。

次いで、彼女は店の奥に置かれた観音開き式の大きな木箱をガサゴソといじりはじめたかと思ふと、その引き出しの中から何か黒くて小さな丸い物体を取り出した。そして「悪い奴じゃななし、毒つてわけでもないんだけどね。まつたく、困つたものさね」とつぶやき、少年にそ

の物体を渡して告げる。

「ほら、これを飲みなさいな」

「えっと……これは？」

「酔い覚ましの丸薬だよ。うちは薬売りだからね」

「ああ、お薬でしたか。いくらですか？」

「いらぬよ。はい、お水ね」

少年はお礼を言うと、丸薬に続いて差し出されたコップを受け取った。そしてその水で丸薬をノドの奥へと流し込む。するとどうだろう。心なしか火照っていた顔がだんだん涼しくなってくるのではないか。そうしてあつというまに気分が落ち着き、少年は驚きの表情で黒猫に言った。

「これ、すごい効き目ですね」

「七代屋の妙薬は医薬祖神の折り紙つきってね。ごひいきに」

その謳い文句に、少年がなんぞやと反応する。

よく見れば、彼女のとなりには風情のある木の看板が立てられており、そこに達筆な黒文字で【七代屋】と書かれていた。また、彼女の前に陳列された小箱にもそれぞれ札が立て掛けられていて、胃痛薬だとか軟膏剤だとか分かりやすい注釈が記されている。と、そのとき、少年は並べられた商品のなかに小さな巾着袋を発見した。彼が気になったのはそれにつけられた商

品名だった。

「猫の……足音？」

「ええ、そうです。珍しいでしょ」

「猫の足音っていうのは何かの通称ですか？」

「あれあれ、お兄さん、猫の足音をご存じないので？」

そう言つて、黒猫が商品の説明をはじめ。

彼女曰く、猫の足音というのは通称ではなく、正真正銘、猫が立てた足音のことらしい。なんでも、猫の足音は魔術材料になるのだそうだ。もちろん、調合しだいで霊薬の素材にも成り得るとのこと。一説によれば、猫が足音を立てないのはその昔、魔女や呪術師が彼らの足音をとりすぎてしまったからなんだとか。

「へえ、そんな逸話があるんですね」

「いまじゃ貴重な代物さ。おひとつどうだい？ お兄さん」

「どうしようかなあ……」

少年は悩んだ。貴重品というだけあって値段もそれなりのものである。デラさんからお給料という名目でおこづかいをもらつてはいるものの、それとて無駄にはできなかった。しかしながら、こういう場所にきて何も買わないというのもまた味気ない。それに、魔術の材料としても使えるようだし、なにより、どんな音がするのか気になつて仕方がなかった。そうして彼は

さんざん悩み、悩んだ結果、店主から割引の提案もあり、試しにひとつ買ってみることに決めたのだった。

「はいはい！　まいどあり！」

楽しい時間とは、どうしてこんなにはやく流れてしまうのか。

気づけば、約束の時刻が近づきつつあった。

少年にとって、このような誰にも縛られない自由で愉快的時間は久しぶりだった。彼の肩かけカバンの中にはすでにくっつかの戦利品が収められており、市場にきたときよりもずっと重くなっている。どうやら、猫の足音を買ったことで、彼のこども心に火がついてしまったらしい。無駄づかいをはいけないと思いつつも、彼は物珍しい獣人たちの食べ物を買いたいし、また手にとった珍品や名品の数々に瞳をキラキラとかがやかせていた。そして、彼はふとカバンの奥から小さな巾着袋を取り出しはじめる。猫の足音だ。警女の宿に帰ってからのお楽しみとしてとっておいていたのだが、やはり、どうにも我慢ができなかったのである。彼は巾着袋を持ち上げ、布の表面に片耳をあててみる。と、かすかではあるが、袋の中で何かが鳴っていた。

しかしながら、それがどんな音かまではつかめない。

少年はその不思議な音を聞きとろうと市場を歩きながら耳の方に神経を集中させた。が、そ

んなふうには露店街を歩いてきたものだから、突然、彼は何かにつまづき、勢いあまってななめ前方にあった出店に突っ込んでしまう。店先に出ている商品棚が壊れ、大きな音を立てて崩れていった。

「おいおい、たいせつな商品になんしてくれるんで？」

「す、すいません。つまづいちゃって」

少年は立ち上がると店先の惨状を目にし、大慌てで謝った。

見れば、屋根から下がった珠のれんのあいだから店主らしきへビの獣人が鎌首をもたげるように顔を出していた。へビの獣人だけあってその肌は艶っぽく、また、からだ中に複雑なまだら模様が入っている。店主は店から這い出ると、細長い舌をチロチロと出しながら地面に散らばった商品のかげらを指でつまみ上げ、抑揚のきいた口調で言った。

「あゝ、こりやもう売りもんになりませんぜ」

「あの、本当にすいません……」

少年は店主に向かって再び頭を下げた。それを見て、店主のへビは目をいやらしく曲げてみせる。

「やっちゃったもんはしかたねえさ。でも、弁償はしてもらわねえとな」

「弁償ですよね……でも、ぼく、あまりお金の方を持っていなくて——」

「商品を壊しといてそりやないでしよ、ぼくちゃん」

そう言うのと、店主はへびさながらのすばやい動きで少年へと詰めよった。

「ヴァナロ遺跡に咲くガラスの薔薇、レダリック諸島に生息するバイコーンの双角、古代樹マナスロの樹液でつくった琥珀玉に珍獣ポカチェットの糞から採取したコーヒー豆、おまけに目玉商品だった眼球職人の魔眼までみんな傷がついちまった。見ろよ、ガラスの薔薇なんてごなごなだ。そんじよそこらの品物じゃないんだぜ。責任もつてぜんぶ買いとるのがすじつてもんじゃないですかねえ？」

「え？ 眼球職人の魔眼ですか？」

「そうですとも。いまじや見る影もありませんがね」

店主が亀裂の入った丸い水晶玉を地面からひよいと拾い上げ、指と指のあいだで巧みに転がしはじめる。そしてこれ見よがしに大きなため息を吐き出したかと思うと、ギロリと少年を睨みつけ、彼の胸ぐらをつかんで軽々と持ち上げた。冷徹で粘っこい、ドスの利いた声が静かに響く。

「金がないってんならどう落とし前をつけようってんだい、ええ？」

「ちよ、ちよっと一回おちつきましょ——」

少年が宙で揺すられる。

瞬間、その衝撃で彼のフードと帽子が落ちてしまう。

一目瞭然だった。灰色の髪の毛が風になでられ、白日の下にさらされてしまったのだ。現れ

た頭には獣の耳もついてなければ長く突き出た鼻梁もないわけで、少年が人間であることを雄弁に物語っている。彼はあわててフードをかぶり直そうとしたが、すでに手遅れだった。見れば、まわりの獣人たちが互いにひそひそと耳打ちをしている。彼らの目は不審や不安、蔑みといったさまざまな感情が滲んでおり、あまり友好的なものとは言えなかった。周囲に、剣呑な雰囲気が広がっていく。

と、店主の目つきがまたいやらしくやまなりに歪んだ。

「おやおや、こいつは驚いた。人間の子ですかい。なるほど、なるほど。こりやあつまり、話のはやい。人間のガキは裏のルートでいい値がつく。獣人市場は人間がくるのを容認しちゃいるが、トラブルに関しちや基本的に自己責任ってことになってる。運が悪かったと思ってあきらめ——」

そこまで言って、店主は言葉を詰まらせた。突然、とてつもなく強大な殺気を全身に浴びたのだ。

彼はノドを鳴らすことさえできず、恐怖に怯えながら視線を下げていく。と、彼の首もとに小さなナイフがあてられていた。それは次の瞬間にでも彼の頸動脈を引き裂きそうなほどに研ぎ澄まされており、強くするどい白光を放っている。そして彼の耳もとで綺麗な声が威圧的に響いた。

「——その子を下ろせ、へびもどき」

声の主はテティだった。彼女は店主の背後から腕を回し、その首すじにナイフを押しあてている。眦から流れ出る殺意はすさまじく、瞳の色が普段の美しい緋色から暴虐なる激しい金色に変貌していた。その絶対的な迫力が死角となっていた店主にも伝わったのだろう。彼はあわてて少年から手を離すと、両手を上げて降参のポーズをとった。次いで、言い訳がましく彼女に弁明する。

「ま、待ってくれ。こいつがうちの商品を壊しちまったんだよ」

「……………そうなのですか？」

テティが少年に訊く。

と、少年は申し訳なさそうになづいた。

彼女は数秒のあいだ何か考え込むように押し黙っていたが、やがてナイフを店主の首すじから外すとそのまま崩れた商品棚のもとへとしゃがみ込んだ。次いで、地面に散らばる商品の残骸を物色し、そのひとつをつまみ上げる。彼女はかたわらに突っ立っていた店主に向かって尋ねた。

「これはヴァナロ遺跡のガラスの薔薇ですか？」

「そうさ、集めるのに苦労したんだ」

「ヴァナロ遺跡のガラスの薔薇は手でふれると数秒で溶けるはずですが」

テティのその言葉に、店主が口をあけたまま目をパチパチとしばたたかせる。と、彼女は続

けて言った。

「バイコーンの双角は中心部まですべて同じ材質ですが、これには芯がありますね。よく見れば、塗装もはげてます。それにこの古代樹マナスロの琥珀玉ですが、重すぎます。琥珀は天然樹脂の化石なので水に浮くほど軽いのが特徴のひとつです。さらに言えば、琥珀は静電気を帯びる性質を持っているのでするとその表面に髪の毛がくっつくのですが、これはくっつくそぶりも見せませんね。そしてポカチェットのコーヒー豆は焙煎の有無に関わらずもつときれいな白色です。香りも悪くはないですが、特上級クラスとは思えません。このキャッチーな香りはエスメダール地方のコーヒー豆では？」

「い、いや、そんなことは——」

「それとこの眼球職人の魔眼ですが……」

「そ、それが一番の貴重品なんだ。他のやつはちよつとアレかもしれないねえが、それはたしかなルートから仕入れたんだ。一週間前に、そう、オークション会場で正式に買った代物だ。嘘じゃないぜ。ほら、購入証明書もちゃんとあるんだ。見てくれよ。偽造なんかじゃない。本物だろ？」

店主が証明書を突き出す。

紙面にはたしかに日付と購入記録が記載されていた。金額はかなりの高額で、ゼロが何個もよこに並んでいる。見たところ、ちゃんとした証明書のようにだ。印鑑もしつかりと押されてお

り、偽造とは思えない。が、それでもテティはいつさいの迷いを見せなかった。彼女はあきれたように息を吐き出し、店主に言う。

「あなたが出品したものを、あなたが再度購入したのでは？」

「ななな、なんの証拠があつてそんなこと——」

店主がさらに動揺する。

と、テティは確信したかのように続けた。

「いえ、証拠があるわけではありませんが、ただ最近、オークション運営側の人間と手を組んで違法に証明書を発行する詐欺集団が出没しているとのうわさも流れています。まあ、いずれにせよ、この眼球職人の魔眼は偽物で間違いないでしょう。本物はこんなに安っぽいものではありませんし、第一、眼球職人の魔眼が落としたりぐらいで壊れるはずがありません」

「……………っ！」

店主はぐうの音も出ないといった感じだった。

すると、テティがダメ押しとばかりに商品棚の折れた脚を見て告げる。

「脚の部分に、刃物で切れ込みを入れたあとがありますね」

「……………あのアホ、もっとマシな細工しとけよ……………」

店主がつぶやき、舌打ちをする。

「最初から誰かに壊させる目的で切れ込みを入れていたのでしょ。せつかくの楽しいひとと

きです。ここで退くならわたしも追及しません。野次馬のなかにまぎれている仲間たちと一緒に、はやくここから退散した方が身のためです。だってここは獣人市場、トラブルは自己責任ですから——」

テティはそう言うのと、ナイフを手のひらで踊らせた。

そしてひときわするどい眼光と殺気を放つ。瞬間、店主と野次馬の中にいた数名の獣人がビクツとそのからだを震わせる。彼らの目にはいま、自分よりもはるかに格上の恐ろしい獣の姿が見えていた。

「ずらかるぞ！ おまえら！」

とたん、店主が野次馬たちにまぎれて逃げていく。と、野次馬の中からロープをはおった数名の獣人が彼のあとを追いかけていった。

その絵面はなんともしまりがなく、滑稽なものだった。なぜなら、走り去る彼らのひとり「ミュージゴの旦那、待ってくれ！」と大声を上げてしまったのだ。これにはヘビの獣人もさすがに虚を突かれたのか、彼はずつこけながら「名前を呼ぶやつがあるか、アホ！」とそいつの頭をはたいていた。彼らはそのまま通りを一目散に走り続け、やがて獣人市場からその姿を消すのだった。

「おけがはありませんか？」

「はい、大丈夫です。助かりました」

少年が地面に落ちていた帽子を拾い、かぶり直す。テティは近くにいた獣人のこどもから預けていた荷物を受け取るとすまなそうに言った。

「申し訳ありません。わたしの責任です。やはり一緒に行動をとるべきでした」

「そんな、テティさんのせいじゃありませんよ」

頭を下げるテティを見て、少年もまた申し訳ない気持ちになる。

獣人市場の雰囲気は浮かれ、まるで危機感を忘れていた。猫の足音に集中していてまわりをろくに見ていなかった自分はいいかもだったはずだ。おそらく、その隙を狙ってあのミュージゴとかいう賊に目をつけられたに違いない。あのとき、何かにつつまづいたと思ったが、あれは彼らの仲間によって足を引っかけられでもしたのだろう。少年はまんまと彼らの罠に掛かってしまったのだ。少年は己の軽率さを反省し、あらためてテティにお礼を言う。しかし、彼女の顔は暗く沈んだままだった。そこで、彼はなんとか場の空気を一新しようと話題を変えることにする。

「それにしても、テティさんは目が利くんですね」

「バーの仕入れなんかをやっていると、自然と知識はつきますから」

「知識だけじゃないですよ。切れ込みのくだりなんてすごい迫力でした」

「あれは反則です。答えを知っていたようなものですし」

「どういう意味ですか？」

「買い物さきの店主たちが話していたんです。最近にせものを売りつけたり、わざと客に商品を壊させて金品を脅しとる不届きなやからが出没していると。彼らのやりくちはまさにそれでしたから。とはいえ、彼らもすこしかわいそうですね。ハメようとした相手が眼球職人の弟子だったなんて」

そう言つて、テティがクスクスと笑う。

言われてみればたしかにそうだ。彼らは偽物の魔眼で眼球職人の弟子を騙そうとしたのである。なんとという皮肉な話だろうか。少年もまたその偶然の怖さが妙におかしくてほほを緩ませしてしまう。そうしてふたりはちよつとばかし笑い合っていたが、やがてテティがお昼ごはんをどうするか尋ねた。あいにく、彼はいまお腹がいっぱいだった。買い食いのせいである。聞けば、テティもテティで仕入れ関係の試食が重なり、お腹は空いてないとのことだった。そのため、ふたりは帰りに要する時間のことも考え、そろそろ獣人市場から引き上げることにしたのであった。

「それじゃあ、帰りましようか」

「ええ、そうですね」

少年がうなづき、テティから紙の買い物袋をひとつ受けとる。

すると、テティは持っていた紙袋から透きとおった瑠璃色の棒つきキャンディを二本、取り出した。そしてそのうちの一本を少年へと手わたし、穏やかに微笑む。

「評判のよいキャンディです。おうちに合うといいんですが……」

「くれるんですか？　ありがとうございます」

少年がキャンディを口に入れる。

と、口内に奥深い甘みが浸透していった。世間一般のキャンディとはすこし風味が違っていたが、その味は格別だった。ふたりはキャンディをなめながら、いまだ続く獣人たちのにぎわいを背に獣人市場をあとにした。

※※※

スタート地点に戻ってくると、辺りはすでに真っ暗だった。

樹海には厚い夜の帳が下ろされ、そこに生息する動植物たちの生態もまた新たな一面を見せはじめていた。朝には何の変哲もないただのキノコだったはずのものが、いまではおぼろげな月明かりを受けて幻想的なエメラルドの光を放っている。また耳をすませば、静寂を枕に激しくも切なげな虫の音が鳴り響き、樹上の鳥たちも夜空に向かって優しく思慮深い鳴き声を上げていた。

「やっと着きましたね」

「遅くまでご苦労さまでした。疲れたでしょう？」

「さすがにもうたくたですよ」

そう言つて、少年は照れ笑いを浮かべた。

思い返せば思い返すほど、今日という日のことを驚かすにはいらなかった。

密林のような樹海を歩き、険しい岩山を登り、その頂上では獣人という幻想奇譚の住人たちと言葉まで交わしたのだ。二本の足は棒のようになっていたが、気持ちはいまだ興奮の余韻を引きずっている。この鮮明な記憶が色あせてしまう前に、はやく日記帳に今日の出来事を書きとめておきたかった。と、そんなことを考えていた少年だったが、ここで、彼はあることに気がついた。

「ところでテティさん、帰りはどうやって？」

それは当然であり、むしろ遅すぎるぐらいの疑問だった。

スタート地点にまで戻ってきたものの、きたときに潜ってきたあの懐古趣味的回転扉はどこにも見当たらなかった。それもそうだろう。あの装置は瞽女の宿に置いてあるのだ。行きは問題なかったが、はたして帰りはどうするのか。少年は疑問符を頭に踊らせながら、テティの方を見やる。

と、彼女は手を叩き、言つた。

「——ジュリエッタ、ジュリエッタ」

瞬間、目の前の地面が螺旋を描くように歪みはじめ。

そしてその渦巻く中心部に穴が生じ、そこから例の回転扉が現れるのだった。

が、そのとき、少年は驚きのあまり持っていた紙袋からリングゴをひとつ落としてしまう。彼はとっさに手を出してそれをキャッチしようとしたのだが、その手は逆にリングゴをはたきとばしてしまい、リングゴはすこし離れた茂みの方へと跳ねながら転がっていった。少年が紙袋をその場に置き、リングゴを追いかける。幸いにもリングゴは茂みに引っかかったらしく、もう転がっていくことはなさそうだった。彼はホツとして立ち止まると、地面の上のリングゴをとろうと手を伸ばした。

刹那、彼の立っていた場所がにわか崩れる。

あつというまに、彼は土砂と一緒に岩壁を滑り落ちていた。

どうやら、茂みのすぐ裏側は崖になっていたようだ。そして不運にも、その末端部分がもろくなっており、少年が体重をかけたことで崩壊してしまったらしい。彼は重力に従い真つ逆さまに落ちていった。地面までの距離はそれほどあるわけではないが、人間が死ぬには十分な距離だ。

——まずい、何とかしなければ。

少年は焦った。空気抵抗のせいでからだの制御がとれず、また焦れば焦るほど判断に迷いが生じ、ハツとしてジャケットの胸内ポケットに手を入れたときには地面がもうすぐそこにまで迫っていた。

——ダメだ、間に合わない。

そう悟った瞬間、少年の視界に赤い閃光が走る。

反転した世界には星空が広がっていたのだが、その星々のまたたきのなかに、とても綺麗で強力な赤い光がふたつ、ほとぼしっていた。それは稲妻のような尾を引きながらもすごい速度で大きくなっていく。いや、こちらに近づいていた。赤い光が間近に迫り、そこで彼はようやく気づく。

テティが、崖の壁を走っていた。

赤い光とは、彼女の瞳から流れ出る緋色の眼光だったのだ。

彼女は絶壁を足場に、強靱な跳躍力を以て落下する少年を追いかけていた。

重力を切り裂くかのような身のこなしは、まるで自分と彼女とではまったく時間の流れが違うのではないかと錯覚してしまいそうなほどすさまじいものだった。彼女は少年に追いつくと彼を抱きかかえ、音もなく地面へと着地する。押し出された空気が風となつて周囲を乱舞し、彼女の髪を巻き上げていく。と、彼女はこともなげに言った。

「危ないところでした」

「テ、テティさんはいったい……」

地面に下ろされた少年が、やっとのことで声をしぼり出す。

彼女が見せた想像を絶する身体能力の高さが、彼の理性をマヒさせていた。それゆえ、彼は

自らが問うた質問に彼女が何か言いづらそうにしていることにも気づかなかった。彼女は何かをつぶやいていたようだが、少年は訊き返すこともせずただ呆然と立ち尽くしている。そうしてやつと正気が戻ってくると、彼はあつと小さな声を上げる。見れば、視線の先にリングゴの残骸があった。

少年はゾツと背筋を凍らせる。

あるいは、自分もこのリングゴのように割れていたかもしれないのだ。

崖から落ちるのはなにも初めてのことではない。前回はデラさんに助けられ、今回はテイさんに助けられた。闇夜においては一見してどこに危険があるか分からない。今後はもつと気を引き締めて行動せねばなるまい。そしてまた、何が起ころうとも焦らずに対処できるような心がまえでいなければ……と、彼は深く反省し、胸内ポケットの魔術合金をぎゅつとにぎりしめた。

そんなとき、彼の視界の端に何かが映る。目を凝らすと、潰れたリングゴのすぐ先に何か白いものが落ちていた。

かすかな月明かりに照らされていたのは、一通の封筒だ。彼はその瞬間、反射的にそれを拾い上げていた。封筒はにぎり潰されたかのようにしわくちゃだった。ひどく汚れており、右下の角の部分が茶色く変色している。封は開けられていたが、よく見るとそのなかにはまだ手紙が入っていた。

「どうかされましたか？」

「いえ、なんでもありません。いま戻りま——」

背後からテイに声をかけられ、少年は手紙を持ったまま振り返った。

が、引き返そうとした彼はそこで硬直してしまう。

——死体だ。

近くの大きな岩を背に、人間が、くずおれていたのである。

亡骸の状態はかなり悪く、下半身は比較的無傷であったが、頭部と上半身は無残にえぐれており、その傷口からは肋骨や内臓といった人間の内容物が丸見えになっていた。顔の皮膚も剥がれているため性別さえ判別できなかったが、スカートを着用していることからおそらくは女性だろう。よく見ると、彼女のうしろの岩には血のあとがべったりと付着していた。てっぺんから垂れ落ちた激しい血流は地面へと進むほどにか細く、また複雑にうねっていて、彼女に訪れた無念の死に際を生々しく描写していた。思わず、少年が呻き声を上げる。と、彼の背後からテイがひよいと顔を出して言った。

「死体ですね」

「殺人……でしょうか？」

「状態がひどいので詳しくは分かりません。ただ、嘔みあとがありますね。死んでから食べられたのか。それとも、食べられながら死んだのか……」

彼女はそこまで言うのと、しばし押し黙った。

どちらにせよ、ここまで損壊が酷いと弔うことすら難しかった。可愛そうな気もするが、あとは自然の処理に任せた方がいいだろう。時間が経てば、彼女の遺体は虫や植物たちによって土へと還るはずである。少年はそう思い、テティのもとへと戻っていった。が、そのとき、テティがなぜか憂いを帯びたような目をしていた。見間違いだろうか、少年が尋ねようと口をひらく。その瞬間、彼の鼻先に水が一滴、落ちてはじける。顔を上げると、雨がポツポツと降り出していた。

「さ、宿へ帰りましょう」

そう言って、テティが少年の手をにぎる。

見れば、彼女の瞳はいつもの綺麗な緋色に戻っていた。

異国の夜陰はことさらに厚く、また深淵めいて見えるため、思わず錯覚してしまったのだろう。それでなくとも、少年はいま心穏やかとは言えない状態なのだ。彼は不憫な遺骸をよこ目で見送ると、テティに背負われ、崖の上の回転扉へと引き返していく。雨雲から差し込む月の光が、彼らの姿を暗然として照らし出していた。激しさを増す雨足は、まるで悲劇の幕間のように……。

## 第二章、箱の中の男

ペンを机の上に置き、少年は「ふう」とひと息ついた。

彼は椅子に座ったまま背筋を伸ばし、ちらりと窓に目を向ける。

窓のそとでは滝のような雨が降っていた。

あれから雨足はどんどん強くなり、いまでは暴風さえ巻き起こして屋敷全体をガタガタと揺さぶっている。警女の宿は嚴重な結界によって守られているが、天候は現実世界の状態に左右されるらしい。制御することも可能なのだが、それだと風情の欠片もないとのことであえてこういう仕様にしているのだ。それゆえ、少年は鳴り響く大きな突風音にたびたび気をとられていた。この調子だと、嵐は明日の朝まで続きそうである。少年が日記帳を閉じ、壁の時計を見る。

時刻はそろそろ深夜を迎えようとしていた。

が、デラさんはまだ帰ってきていなかった。

どうやら用事が長引いているらしい。少年はオッド・アイで夕食をとると、温泉でたまっていた疲れをたつぷりと癒した。それから自室へと戻り、魔術の練習や勉強などあれこれと作業をしているうちに、なんやかんやで現在にまで至っている。本来であればすでに就寝している

時間だったが、彼の意識ははまだ冴えわたっていた。屋敷を叩く雨風の騒音もあったが、それ以上に、獣人市場の衝撃が彼の精神状態に強い影響を及ぼしていた。まぶたを閉じれば、靈妙な怪異な獣人市場の記憶が鮮明によりみがえってくる。それは非日常的で、超自然的で、まるで異世界の玩具箱を引っくり返したかのようなある種の幻魔術的遊戯感を宿していた。怖い思いもしたが、不謹慎ながら、それさえいまではこどもの冒険心をくすぐるアクセントとして印象に残っている。

——できることなら、弟と一緒にきてみたかった。

一瞬、そんな考えが少年の頭をよぎった。

彼は寂しげな笑みを浮かべ、そしてすぐにかぶりをふって我に戻る。

と、無意識のうちに一通の封筒と目があった。

机のはじめに置かれたそれは樹海に落ちていたあの封筒だった。少年はいろいろと悩んだのだが、結局、無視できずに持ち帰ってしまったのだ。夜目では分からなかったが、封筒の表面には差出人の名前はおろか、宛先さえ書かれていない。しかも、封筒自体も市販されているようなちゃんとしたものではなく、うすい罫線の入った別の紙を蠟で張りつけたひどく不格好なものだった。見れば見るほど異様な封筒だ。おそらく、すみの飛び散ったような変色はあの遺体の返り血だろう。

少年は慎重に封筒の中身を取り出していく。

しわくちやの紙にはいったい何事が書かれているのか……。

灯を消した暗い部屋のなか、アームライトの黄色い光に照らされながら、少年は手紙の文面を読みはじめた……。

ああ、どうして、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

いま、わたしはひどく混乱し、狼狽している。ことの発端は一週間前の酒場での出来事にさかのぼるのだが、残念ながらすべてを事細かに書き記すことはできない。わたしに残されたのは壊れかけのペン一本と紙切れ一枚だけなのだ。とはいえ、これからここに羅列する駄文を読み手が悪質ないたずらの産物として切り捨ててしまわぬよう、自己紹介だけはしておかなければならないだろう。わたしの名前はエリック・ベーカー、カツシュデールランドで働く雑誌記者の端くれだ。かつては一流の新聞記者を目指していたが、生来の反骨精神がたり、いまでは三流のゴシップ記事を追いかける日々を送っている。今回の件も、もとはと言えばそんなわたしの性格が招いた悲劇なのかもしれない。とにかく、わたしはこの理もれ木のような境遇をなんとか脱しよう、さまざまなスクープを手当たりしだいに追い求めていた。そしてあるとき、とある伝手からどうにもきな臭い情報を手に入れたのだ。それはシャーマニズムなどの神秘思想が根づく地、ダルマスカ公国における王室絡みの血なまぐさいうわさ話だった。現状からの一発逆転を狙っていたわたしにとって、その情報はとても魅力的だった。それにダルマス

カ公国といえぱつい最近、末のフェルフィーナ第三公女が不幸な事故で亡くなったばかりである。これはきつと何かある。そう思ったわたしはすぐにダルマスカ公国へと足を運んだ。そうして現地に到着すると、わたしはさっそく聞き込みをはじめたのだが、見慣れぬ男の姿はやはり怪しく映るのだろう、彼ら民衆の態度は冷ややかなものだった。結局、その日は有力な情報聞き出すこともできず、気づけば日が落ち、あたりも暗くなってきたため、わたしは近くにあった小さな宿で身を休めることにした。その宿では女将のほか若い女性がひとり働いており——おそらく女将の娘だろう——彼女はなにかとわたしに声をかけてくれた。どうやら、彼女は外の世界に興味を持っているらしい。訊けば、彼女は生まれてから一度もダルマスカ公国から出たことがないとのことだった。異国の地で孤独感を味わっていたわたしは彼女のその素朴な笑顔にすっかりやられてしまったようで、柄にもなく彼女の気を引こうとつい見栄を張ってしまい、自分が名うての新聞記者だと偽ってしまったばかりか、酔いにまかせて「この事件の調査が終わったら一緒にこの国を出ないか？」などとおよそ素面では言えないようなことを口走っていた。まったく、お酒の力とは怖いものだ。その後も彼女とはいろいろと話したはずなのだが、恰好つけて飲み続けたお酒が災いしてか、よく覚えていない。目を覚ますと、わたしは酒ビンが置かれたテーブルの上に毛布一枚で突っ伏していた。外はもう真っ暗で、宿の酒場はわたしがきたときよりもずっと人が増えていた。わたしは彼女にひと声かけようと思ったが、彼女はとても忙しそうにしていたため、代金をテーブルに置くと、そのまま酔い覚ましの

散歩へと出かけることにしたのだった。とはいえ、きたばかりのわたしに土地勘があるはずもなく、見慣れぬ通りの角を何度も曲がっていくうちに、わたしはいつのまにか迷子になってしまっていた。本当にマヌケだったとしか言いようがない。時刻は深夜を回っており、人の姿はひとりとして見当たらなかった。困り果てたわたしは近くの石段の上に腰を下ろし、夜空に浮かぶ月に「どうしたものか」とタバコの煙を吹きかけ続けた。するとそのとき、近くの路地で人影が動いた。わたしは道を尋ねようとその影を追いかけたが、影はどんどん道らしからぬ道を通ってゆき、そしてついに森のなかへと入っていったのだ。このとき、わたしの脳内ではすでに道を尋ねるといふ発想は消えていた。ただその男の怪しい挙動に血が騒ぎ、わたしは野心と好奇心だけでひたすら尾行を続けていたのだ。しかし、それがいけなかった。暗い森を進む途中でわたしは首のうしろに激しい衝撃を受け、そのまま昏倒してしまったのだ。おそらく、男の仲間によられたのだろう。

気づけば、わたしは狭い箱の中に押し込められていた。手足は縛られていなかったが、そのあまりの狭さのため、からだの自由はほとんどないも同然だった。立つことはおろか座ることさえできぬその暗い箱の中で、わたしは両ひざを折りたたみ、また背を曲げて、赤児のように横たわっていた。箱は金属製で冷たく、どう足掻いても壊せそうにない。寝転んだ先には長方形の窓が開いていたが、腕を出すのが精一杯だった。閉じ込められている——わたしの頭から血の気が勢いよく引いていった。わたしはすこしでも情報を得ようとその小さな窓に顔を押し

つけ、外のようすを必死になって探った。見れば、箱の外は洞窟然としていて薄暗く、蠟燭であろろうオレンジ色の弱光がゆらゆらと地面や壁の表面で揺らいでいる。そしてその灯りのもとで、黒い箱がひとつ、雑然と置かれていた。おそらく、わたしが入れられている箱と同じものだろう。その黒い箱にもわたしのものと同じような四角い窓がついていた。もしやと思い、わたしは箱に向かって呼びかけてみたが、返答はなかった。聞こえてくるのは、ぴちゃん、ぴちゃん、という水滴がはじける音だけである。そうこうしているうちに、箱の中に充満する暗闇と悪臭がわたしの恐怖心を煽り立てていった。わたしは大声を張り上げ、助けを呼んだ。無理な体勢で声を出すのはなかなか大変だったが、それでも叫び続けた。すると突然、ガンと金属を打ったような音が洞窟内に響いた。ハッとして窓を見ると、向かいの箱の窓の奥で何かがちらちらと見え隠れしている。やはり、向こうの箱にも誰かが入っているのだ。わたしは同じ境遇の者を見つけて嬉しくなり、さっそく彼に話しかけた。ここはどこで、いったい何がどうなっているのか。知りたいことはたくさんあった。だがしかし、わたしの問いかけに彼はひと言として答えなかった。彼はどうかやら精神に異常をきたしているらしく、呻き声とも唸り声ともつかない声を上げながら、箱の中でごそごそと蠢いていた。一瞬、窓のすきまから彼の顔が見えたが、その目は完全に気狂いのそれだった。わたしはゾツと背筋を凍らせた。地獄に落とされたような気分だった。あれが、わたしの遠くない未来の姿かもしれないのだ。窮屈な箱の中で理性を失い、また言葉を失い、涎を垂らしてあらぬ方向を睨めつけるせむしの肉塊——わたし

しは堪らなくなつて髪の毛をメチャクチャに掻き毟つていた。ああ、わたしはいまどんな顔をしているのだろうか。人間はあまりの恐怖にさらされると一夜で白髪になつてしまふと聞いたことがある。爪のあいだにはさまつた髪の毛はちゃんと色を帯びているだろうか。まさかすでに……いや、弱気になつてはいけない。わたしは自分の精神が闇に蝕まれてしまわぬよう、ここに状況を書き記しておくことに決めた。幸い、わたしは雑誌記者の端くれだ。ペンなら所持している。倒れたときの衝撃でペン先がぐらついていたが、使用には問題ないだろう。また紙はコートのポケットに入つていた請求書用紙の裏面を使えばいい。自前の手帳は襲われたときに落としてしまつたようで、残念ながら見当たらなかつた。もしかしたら、やつらに奪われてしまつたのかもしれない。とにかく、心を強く持つのだ。そして、どうにかして逃げ出すチャンスを見つけ、必ず生きて町に帰るのだ。

ここまで書くのにけっこうな時間がかかつてしまつた。なにせ、身動きすら制限されるこの狭い箱のなかで、窓から差し込むわずかばかりの明かりを頼りに、少しずつ、また思い出しながら、現在進行形で黙々と書き連ねているのだ。正確な時間は分からないが、閉じ込められてからすでに一日以上は経過しているのではなからうか。先ほどから、わたしのおながが何度も腹鳴を響かせている。するとちやうどそんなとき、閉ざされた空間にある異変が生じた。足音だ——誰かがこの箱に近づいていた。わたしは箱の中で身がまえた。足音が止み、窓の外に汚い長靴がのぞく。と、箱の窓から何者かの腕がゆつくりと入つてきたのだつた。わたしはぎよ

つとしたが、よく見ると、その手は何かを持っていて。それはうす汚れたトレイで、そこにはひとかけらのパンと少量の水がこれまた粗末な皿と器に入っていた。手はトレイを箱のなかに置くと、またすぐに窓の外へと引き返していく。わたしはその手にしがみつくと「ここから出せ」と言わんばかりに噛みついた。が、向こうもこうなることは予測済みだったので、その腕には分厚い革の手袋が装着されており、まるで歯が立たなかった。それでもわたしは腕に食い下がり続けたが、結局は力負けし、腕を取り逃がしてしまふのだった。靴音はそれからしばらく箱の近くをうろうろしていたが、やがてどこかへと遠ざかっていった。わたしは去りゆく足音に向かって悪態をついた。その瞬間、わたしの口から何かがこぼれ落ちる。目を凝らすと、器の水底に奥歯が沈んでいた。どうやら、先のひと悶着で奥歯が折れてしまったようだ。わたしは痛みと悔しさで箱を内側から殴りつけていた。口の中が血なまぐさくてたまらない。不快感に苛まれたわたしは器の中の水で口をゆすぎ、深呼吸を繰り返した。焦っても事態は好転しないだろう。いまは無駄に体力を消費しない方がいい。そう思ったわたしは与えられたパンを水で流し込み、ひとまず眠りにつくことにした。まだチャンスはあるはずだ。明日になればきっと……。

そう思っていたのだが、チャンスは一向に現れなかった。あれから何日が経ったのか分からないが、変化など何もなかった。定期的にパンと少量の水が配られる以外はまるで音沙汰もなく、ただただ暗く冷たい箱の中で過ごすだけ。頭がおかしくなりそうだった。それに、なんだ

か体調も優れない。脳がぐらぐらとして気分が悪かった。肌寒いはずなのに、からだは異様な火照りを覚えている。風邪でも引いたのだろうか。筋肉の気怠さに対して、感覚はやたらと鋭敏になっていた。目をつむると、以前は気づかなかった音が聞こえてくる。箱に押し込められた、たくさんのうめき声が、ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつと、そこかしこから聞こえてくる。狭い箱の中で、人間たちももぞもぞと、ぐねぐねと……熱い、汗がとまらない。燃えるような、嫌な臭いが鼻にまとわりついてくる。気持ちが悪くてしかたがない。今日はもう、筆を置くことにしよう。

ああ、ここは、ここは、やはり人外境だ。鬼の住む、狂人の魔窟だ。穴ぐらだ。向かいの男が消えた。箱の中から消えたのだ。つれていかれた。彼だけじゃない。彼を筆頭に、もういくつものうめき声が消えている。そのたびに、新しいせむしがやってくる。どうにかして連絡をとりたいが、ノドがしびれて声が出ない。ノドが、焼けたように動かない。箱の中で悶えるだけ。もぞもぞと、蠢くだけ。死が近づいてくる。糞尿にまみれて、地獄にまぎれて。地獄の底から、絶叫が聞こえてくる。恐ろしくて、悲しい、獰猛な声だ。嫌な臭いが濃くなった。怯えた血の臭い。無念の臭い。次は、わたしかもしれない。そうだ、わたしだ。わたしに決まってる。この筋肉が固まった、醜い、醜い、せむし男に。暗いよ。暗い。光がほしい。見たくないのに、見えるはずのないものが見えてしまう。あれは誰だ。あれは、あれはたしか、死んだはずのフェルフィーナ公女だ。フェルフィーナ公女の亡霊が、青白い顔の亡霊が、わたしの前に

立っている。ありえない。まぼろしだろうか。分からない。もう何も分からない。彼女がまぼろしなのか。それともわたしがまぼろしなのか。わたしはもうとつくに死んでいるのかもしれない。ここにるのは死人の記憶か、残留思念の再生か。どちらにしろ、わたしの人生は潰えた。ああ、無念だ。無念。紙のスペースがもうない。涙が、誰かこの文章を誰か、こんなことなら、ああ、タバコが吸いたい。タバコの風味が、懐かしい。あの宿で食べたグラタンも、死にたくない、母の顔が、車輪の音が、いやだ、いきたくない、いやだ、カッシュデュールにいれば、カッシュデュールにさえすれば、ああ、ああ、ガッシュデュール、デュール、デュール、愛しい犬の、しっぽ……。

それ以降は文字の震えと滲みで解読不能だった。

何なのだ、この手記は……。

少年は手記の内容に総毛立っていた。

なんという鬼気迫る文章だろう。紙の節約のためか、綴られた本文はろくに改行もされておらず、紙面を小さな文字でびっしりと埋め尽くしていた。最後の方は狂気すら感じるほどである。紙はすり切れ、血とインクで汚れたその断末魔の文面には箱の中の男の恐怖がべったりとへばりついていた。

いたずらとは思えなかった。

記されていたとおりに、紙の裏面はちゃんと請求書用紙になっている。そこにはしっかりと社名も示されていたし、金額も、氏名も書かれている。日付はといえば、三年ほど前になっていた。

こんな手の込んだいたずらを誰がやるというのか。誰に発見されるとも分からないというのに。少年は狭い箱に詰め込まれた男の怨念じみた筆致に身震いを禁じ得なかった。確証はないが、彼は直感的に本物だと確信していた。とはいえ、いたずらではないのだとしたら、この怪筆録は……。

瞬間、大きな音が部屋に響いた。

少年が「ぎゃっ！」と驚き、背筋を伸ばす。

音のした方を見ると、部屋の窓に何かが張りついていた。

それは焼け焦げたオレンジ色の紙切れで、ボロボロだったが、よく見ればどことなく鳥のようなかたちをしていた。また先の手紙にも似た謎の怪文が書かれていたみたいだが、この激しい雨風によって滲み落ち、溶けた黒文字がひどく不気味に滴っていた。ビタビタと窓ガラスの上で踊るそのさまはまるで陸に打ち上げられた魚のようである。少年は窓をあけ、おそろおそろその紙切れを手にとった。が、そのとき、窓のそとで何者かの影が動いた。影はそのまま裏口の方へと消えていく。

「デラさん？」

少年はそうつぶやき、部屋を出た。

瞽女の宿はべらぼうに広いため、外界と通じる裏口もいくつか用意されている。少年が向かったのはそのなかでも特に利用頻度の低い裏口だった。荘厳な正面玄関と違ってかなり古めかしく、また掃除も行き届いていないので、裏口というよりはもはや物置といった方が正しいのかもしれない。軋む床にほこりまみれの絵画調絨毯が敷かれているそのさまは、まるで屋根裏部屋も同然だ。壁ぎわには使っていない家具や魔術具などのガラクタ然としたものが雑多に積まれており、少年はそれらを振動で崩さないよう気をつけて足を運んでいく。と、その奥に趣のある木製の扉が現れる。

手紙の余韻が響いているのか、心臓が激しく脈打っていた。

少年は息をひそめてドアスコープに目を近づける。

その瞬間、ドアスコープを突き破ってすうどい刃物がとびだしてきた。

吹き飛ばされ、少年が大きな尻もちをつく。ギリギリだった。本当にギリギリだった。耳が熱くなり、鼻先に、自分の髪の毛が一本、落ちてくる。次いで、風穴のあいた扉が音を立てて蹴破られた。

見れば、そこに誰かが立っていた。

怪人物が扉を抜け、ゆっくりと瞽女の宿に足を踏み入れる。

と、闇夜の暗がりに隠されていたその姿が激しい稲光に照らし出された。

真夜中の訪問者は……若い女性だった。

つばの広いとんがり帽子を頭にかぶり、そこから流した二本のおさげ髪は世にも美麗な黄玉色トパーズカラーを呈している。スタイリッシュな黒マントを羽織った出で立ちは眼球職人と同じく魔女のようなであったが、その見た目から受ける印象は正反対だった。デラさんが淑やかな大人の女性であるのに対し、彼女は気品はあれど、どこか粗野で殺伐とした雰囲気をまとっている。それは彼女の衣装にも表れており、足もとには頑強なロングブーツを、腰もとには物々しいベルトを何重にも巻きつけていた。しかしとりわけ注目すべきは、その手に黄金つるぎにきらめく大きなハサミを持つていたことだろう。豪華な光を宿したそれはまるで鉄つるぎのようであり、不思議な威圧感を放っている。彼女はハサミを握りしめたまま、きれいな瞳で少年を睨むように見下ろしていた。

「あ、あの、どちらさまで——」

言った瞬間、女は持つていた大ハサミを少年に向かって振り下ろした。

彼は叫びながら半身をひねり、命からがらその剣先を避ける。床板に穴があき、一瞬、滑稽な静寂が訪れた。

が、その静寂もまたすぐに打ち破られる。

女が床に突き刺さったハサミを引き抜き、少年に向かって再び振り下ろしたのだ。

有無を言わさぬその執拗な攻撃に、少年は尻もちをついたまま絨毯の上をあとずさっていった。振り下ろされては避け、振り下ろされては避け、繰り返される女の攻撃によって床が穴だらけになっていく。そうして何度目かの襲撃をかわしたとき、まわりに積まれていた家具の山が崩れ出し、不運にも逃げ惑う少年の行く手を塞いでしまう。少年が殺気を感じ、ハツとして振り返る。

と、やはり女が上空でハサミを振り上げていた。

しかも、彼女は獲物が逃げられぬようブーツで少年の胸を踏みつけている。皮肉にも、背にした絨毯の狩猟図がいま現実のものになるうとしていた。少年は抵抗したが、女の力はすさまじく、拘束は容易にほどけなかった。そんな彼を嘲笑うかのように、ブーツに印された髑髏マークが悪魔的なスマイルを浮かべていた。そして制止の言葉を切り裂き、ハサミの切っ先が少年に迫る。

刹那、部屋がパツと明るくなった。

何が起こったのか。

少年は反射的につかんでいた銀製の皿をゆっくりと下げてゆき、その隙間からちらりと周囲のようすを窺った。黄金の大ハサミは少年の眼前で止まっており、女もまた固まったようにその動きを止めている。彼女は黙したまま、部屋の入り口である階段の上にその視線を送っていた。見ると、視線の先には黒いキャペリンハットをかぶった女性の姿がある。どうやら、彼女

が部屋の電気を点けたらしい。彼女は散らかった部屋の中で組み合うふたりを発見すると、微笑して言った。

「やあ、誰かと思えばジェイミーじゃないか」

※※※

「彼女はジェイミー。わたしのご同輩で、世に言う耳職人だよ」

「ジェイミー・スクリームよ」

デラの紹介に、彼女はムスツとした顔で訂正を加える。

裏口でのひと騒動のあと、三人は瞽女の宿の客間へと移動した。ふたりは雷雨で濡れたからだを暖炉の炎で乾かし、いまは三人で仲良くテーブルを囲っているとろろだ。しかし仲良くとはいえ、ご機嫌で紅茶をいれるデラとは対照的に、ジェイミーと呼ばれた女性はすこし不機嫌そうだった。彼女はティーカップに注がれた湯気立つ紅茶をすすると、黄玉色のするどい眼光を少年に差し向ける。

「それであんたは？ コソ泥じやなさそうだけど」

「自己紹介が遅くなつてすいません。ぼくはモアベル・ブラックパッチと申します。縁があつてデラさんの、つまり、眼球職人の弟子としてここで働かせていただいています」

そう言って、少年が頭を深々と下げる。

とたん、ジェイミーは含んでいた紅茶を嘔き出した。

「で、ででで、弟子!!」

ジェイミーが立ち上がり、勢いよくデラの方へと身を乗り出す。

彼女はデラの両肩を揺さぶってわめいていたが、当のデラはまったく動じる気配もなく、ただあわてふためく彼女の姿を見ながら「あつはっは、あつはっは」と笑っていた。そんなやりとりがしばらく続いたあと、ジェイミーはついにあきらめたのか、自分の座っていた椅子へと崩れるように腰を落とした。次いで、彼女は悩まし気に自分の髪の毛に手をあてながら、疲れのような、またあきれたような声を絞り出す。

「前代未聞だわ……」

「運命的な出会いがあつたのさ」

「運命的って、あんたねえ」

彼女がつぶやき、懐疑的な視線を少年にぶつける。

「はい、あの、デラさんには危ないところを助けてもらいました——」

そう言って、少年は眼球職人に弟子入りした経緯をこいつまんで説明した。そして自分の右目にはまった魔眼を彼女に見せる。と、ジェイミーは弟子の件についてそれ以上とやかく言わなかったが、その雰囲気から見てまだあまり納得していないようだった。そんな彼女に、今度

はデラが尋ねる。

「まあまあ、それより、どうしてまた君がここへ？」

「あなたに手紙を出したのに全然返事が返ってこないから直接きたのよ」

「手紙？ はて、そんなものきてたかな」

「あつ、もしかして……」

手紙と聞いて、少年はあることに思い当たった。部屋の窓に張りついていたあのオレンジ色の紙切れのことである。ジェイミーに確認すると、やはりそれが彼女の出した手紙だった。なんでも、彼女は魔術で紙切れを自在にあやつれるらしい。とはいえ、どうしてあんなに焼け焦げていたのか。少年が疑問符を踊らせる。すると、それを見たデラが思い出したように口をひらいた。

「ああ、なるほど。最近、警女の宿のセキュリティを強化したんだよ。そのせいで君の式紙がアップグレードされた結果に引っかけってしまったんだろう。いや、ごめん、ごめん、すっかり君に対する警備システムを解除し忘れていたよ」

そう言って、デラが朗らかに笑う。

ジェイミーはそんな陽気な友人を「こいつは……」と睨みつけていた。

「しかし、その結果をぶった切ってくるとはさすがだね」

「当然よ。わたしに切れないものはないわ」

苛立ちから一転して、ジェイミーが得意げな顔になる。彼女がデラさんの性格に慣れているのか、それともデラさんが彼女の扱いに慣れているのか、おそらくはその両方だろう。彼女たちのやりとりは見ていて妙に小気味よかった。そしてジェイミーの機嫌も直ったところで、デラは本題に戻った。

「それで、手紙の用件はなんだい？」

「最近、わたしの管轄区域で不審な死者が出てるのよ」

ジェイミーが真面目な声色で彼女に告げる。

管轄区域とは、この世界を創造した五大職人のそれぞれに割り当てられた担当地区のことである。職人たちは現在、人間という種の繁栄のため海を隔てた世界の各地に散っており、ここで人の生と死を見守っているのだ。書庫にあった創世記録によれば、蠢く土塊から人間へと変化する過程において、ときに異常進化した生物、いわゆる怪物などはその地の管理者である職人が人間たちに力を与えて討伐させたり、あるいは封印させたり、また、あまりにもひどい場合は職人みずからが介入して退治することもあったという。そういった歴史がいまでは神話や伝説として扱われているのだ。人間がいったばしの文化を築き上げた現代においては、そのような怪物もすでに表舞台から姿を消しており、人間が起こす戦いといえどもっぱら人間同士の抗争であるのだが、今回、彼女の管轄区域で起こっている不審な人死にはどうもいつもと毛並みが違うらしい。

聞けば、謎の獣による人食い事件が頻発しているのだという。

自然という大きな枠組みの中で生きている以上、人間が他の生物に食われることもまた当然のことである。されど、今回のケースはどうも普通のそれではないらしい。突如として現れた正体不明の怪物に、現地の人々はかなり怯えているようだ。もちろん、偶発的に発生した大型個体の獣による一時的な被害の可能性も否定できないが、彼女の直感になにか不穏な気配を察知しているのだとか。彼女曰く、耳職人であるがゆえか、虫の知らせがよく聞こえるのだという。なににせよ、管轄区域の管理者として無視できないので、一度、調査に出向くとのことだった。そしてその前に、デラさんにあることを確認するため、こうして警女の宿までやってきたというわけだ。

ジェイミーが紅茶をすすり、デラに訊く。

「ちよつと前にそっちの方で大きな魔力衝突があったでしょ」

「ああ、少年の件でね。異次元の扉が短時間だがひらいてしまったんだよ」

「たぶんそれよ、それ」

「お騒がせして本当にすみません」

「別にあなたのせいではないでしょ。顔を上げなさい」

ジェイミーは少年にそう言うと、空咳をはさんで続けた。

「とにかく、それがちよつと気になってたし、もし、あなたのところのゴタゴタがこっちの管轄

区域に流れてきてたのなら、わたしが動くのも納得いかないって思ってたんだけど、でも、あんたらの話を聞いたかぎりじゃそっちの件は特にうちとは関係なさそうね」

「あながち、そうとは言い切れないかもね……」

デラが小声でつぶやく。

と、ジェイミーがすばやくそれに反応し、訊き返した。

「ちよつと、いまなんか言ったでしょ。なによ、なんて言ったのよ」

「いや、何でもない。気にしないでくれ」

「って気になるじゃない。教えなさいよ」

「まあまあ、それについてはまたあとにしようじゃないか」

「あんた、またなんか隠してるでしょ。だいたいね、あんたはいつつも——」

そこまで言って、ジェイミーは言葉を詰まらせた。

彼女の口に、デラがパウンドケーキをひよいと放り込んだのだ。彼女はデラの突然の行為に目を吊り上げたが、口内に広がる芳醇なバター風味にその怒りを抑え込まれたのか、彼女は何か言いたそうにしながらもそのまま大人しくケーキをほおばり続けていた。そんな彼女を見て、デラは微笑し、からになったティーカップに紅茶を注ぎ足していく。と、ジェイミーはその香り高い紅茶で口の中のケーキを流し、ホッとひと息つくのであった。

「それで、その異変が起きてるのはどこの国なんだい？」

「……ダルマスカ公国よ」

「——ダルマスカ！」

「おや？ 少年、どうしたんだい？」

「あのですね、実は今日、こんなことがありまして——」

訊かれて、少年は先ほどまで読んでいた手紙のことを話した。獣人市場の帰りに拾った、あの不気味な手紙のことだ。日付は三年前のものであったし、それに箱の中の男による恐怖の体験記録が現在進行形の惨死事件と関係しているようにも思えなかったが、ただ、森で見かけた死体の件もある。あれにはたしか嘔みあとが残っており、まるで獣に食い荒らされたような状態だった。これは偶然だろうか。ジェイミーさんではないが、少年もまた、なにやら虫の知らせのようなものを感じていた。

「——というわけなんです」

「なるほど、それはたしかに気になるね」

そう言つて、デラが考え込むような仕草をする。彼女はあご先に指を当て、その紫水晶色の瞳に静かなきらめきをたゆたわせていた。少年はその魔性のかげやきを見つめながら、ノドの奥で鈍い唾液の音を立てる。嫌な予感がしていた。意識の壁を超える超常的な思惑に運命を絡めとられたかのような、あるいは、陰鬱な底なし沼へと手繰り寄せられているかのような、いまだ見えざる邪悪さと、また未知の悲しさに、鳥肌が立っていく。と、そのとき、ジェイミー

がにわかには口をひらいた。

「あんた、ちよつとわたしと一緒にきなさい」

「え？ きなさいって、どこにでしょうか？」

「どこって、ダルマスカ公園に決まってるじゃない。明日、調査に出かけるわ。あんたはそれに同行するの。いい？」

そう告げて、彼女は居丈高に少年を指さした。

嫌というわけではなかったが、少年はその急な要請に若干の戸惑いを覚え、師であるデラへと視線を投げた。すると、彼女はすぐにそれを承諾したようで、となりに座る少年の頭をなでながら言う。

「それは名案だ。きつといい勉強になる。うちの弟子をよろしく頼むよ」

「デラさんはいかないんですか？」

「悪いけど、わたしはまだちよつと調べたいことがあってね」

「なによその感じは、わたしと一緒になのが不服なの？」

ジェイミーが腰を折り曲げ、その顔を少年へと近づける。間近に迫った彼女の顔はデラさんとは違った瑞々しい美しさであふれていた。キラキラと乱反射する黄玉色の瞳は所有者の勝ち気な性格と相まって、まさにエネルギーの奔流のようである。その有無を言わさぬ絶対的なきらめきの前に、少年は無意識のうちにこう言っていた。

「——お世話になります」

その後、ジェイミーは警女の宿に泊まっていくことになった。

彼女は終始不愛想だったが、警女の宿の温泉は嫌いじゃないらしく、デラに誘われるとなんだかんだ文句を言いながらも結局は入ることに決めたらしい。一方、少年は客間を出るとすぐに自分の部屋へと戻っていった。獣人市場に引き続き、またも遠出になるのだ。早めにベッドに入った方が賢明だろう。そう思った少年が布団をかぶる。睡魔はすぐに押し寄せてきた。今までの疲れがどつどつり返してきたようで、彼は荒れ狂う雷雨の音さえはねのけて、すぐに眠りの中へと落ちていった。

※※※

翌朝、空には透きとおるような晴天が広がっていた。

少年は中庭の真ん中に立ちながら、心地よい風を全身に浴び、ぐっと背を伸ばす。

降り注ぐ陽光のなかに、昨夜の雨の香りがほんのりと残っていた。草花の上には微細な雨粒がたくさんのつており、それらが陽の力を受けて水晶のように光っている。そんな光の結晶に誘われたのか、彼らの頭上では色鮮やかな蝶々たちがひらひらと舞っていた。ジェイミーはし

ばらくそれを眺めながら顔をほころばせていたが、少年の視線に気づくと、ハツとして我に返り、言った。

「それじゃあ、出発するわよ」

「はい！ でも、どうやって行くんですか？」

「まあ、ちよつとそこで見てなさい」

訊かれて、ジェイミーは懐から折り畳まれた黄色い色紙を取り出した。そしてそれを空中に放り投げると、腰につけていた刀剣用の固定ホルダーから例の黄金鍔を引き抜き、そのまま目にもとまらぬ速さで踊らせる。一見して、彼女が何をしたのか分からなかった。色紙には何の変化もなかったからだ。しかし、彼女が手にしたハサミを腰元のホルダーに戻した瞬間、まるで静止していた時間が動き出したかのようにきれいな紙吹雪が周囲へと散ってゆき、その紙面に魔法陣にも似た精緻で美麗な文様が刻み込まれるのだった。

「お見事、さすがの腕前だ」

「すごい……」

少年はジェイミーの超絶技巧に吐息をもらしていた。が、驚くにはまだはやい。なんと、至高の切り紙細工がまばゆい光を放ち、そこに巨大な黄色い怪鳥を顕現させたのだ。その大ききたるや、おそらく大人が三、四人のつても平気そうなほどである。愕然として固まる少年の目の前で、怪鳥は毛艶のある翼を雄大に広げ、青空に向かって甲高い鳴き声をひとつ、張り上げ

た。

「いってらっしゃい。気をつけてね」

「なにぼさつとしてんのよ。ほら、行くわよ」

そう言つて、ジェイミーが怪鳥の背中にとびのる。と、彼女に続き、少年もまた怪鳥の背によじ登つた。

そしてジェイミーの「ゴー」という出発のかけ声を合図にして、怪鳥が両翼を大きく羽ばたかせはじめる。それにより発生した強力な風圧は中庭の草花を放射状にしならせ、ついにはその巨大なからだをふわりと宙に持ち上げてしまう。怪鳥は風にのり、そのままバツサバツサと舞い上がっていった。地上で手をふるデラの姿がどんどん小さくなっていく。上昇するにつれて彼女の姿は点となり、そして気づけば、あつというまに彼らは白い雲の波間にその身をゆだねていたのであつた。

※※※

空の旅は少年の心に新たな衝撃を与えていた。

真下に敷かれた町並みはどれもミニチュアサンブルのようであり、パノラマに広がる驚異的な世界はまさに神の箱庭と言つても過言ではなかつた。黄緑色の穏やかな草原に、町から町

へとなぞられた細かな行路、屈強な山塊たちが縦横無尽に駆け巡り、深い森と仲良く共生関係を築いている。見渡せば、視界の果てでキラキラとした巨大な青色が横たわっていた。海である。地平線は大海原を以てこと切れているが、そのさらに向こう側にもまた別の大陸があるのだ。少年が興奮し、怪鳥の背から身を乗り出す。と、そんな彼に対し、ジェイミーは諫めるように言った。

「あんまりはしゃぐと落ちるわよ」

「すいません。つい……」

少年は謝ったが、その気持ちはなかなかおさまらなかった。

彼女に言われていったんは大人しくしていたものの、初めて見る俯瞰した世界の誘惑に彼はどうしても我慢できず、気がつくくと、怪鳥の背にしがみつきながら首を伸ばし、眼下に広がる壮観な風景をのぞき見てしまうのだった。その純粹な瞳に、ジェイミーがそっぽを向きながらつぶやく

「ふんっ、好きにしなさい。でも、落っこちてもわたしは助けないからね」

それから、空の旅はしばらく続いた。

少年は次第に落ち着きを取り戻し、いまではその興味の対象も風景からこの巨大な怪鳥へと移っていた。

訊けば、この黄色い巨鳥はコーネリアという名前で、ジェイミーの使い魔のようなものらしい。切り絵でつくる彼女独自の魔法陣——通称、式紙術を介することで自由自在に呼び出せるのだという。そんなコーネリアは飛行能力に長けており、ジェイミーはもっぱら移動に彼女を使うとのことだった。ふたりの信頼関係は非常にあついようで、ジェイミーはいま、コーネリアの首を枕にしながらごろりと寝転がっていた。すると、その穏やかな雰囲気に惹きつけられたのか、近くを並走していた小鳥たちがジェイミーのまわりに集まってくる。そしてそのうちの一匹が愛らしくさえずりながら、彼女の大きいとんがり帽子の上でくるとまわりはじめたのだった。

ジェイミーが目をあげ、人差し指を小鳥にさし出す。

と、小鳥は彼女の指の上でその小さな羽を休ませる。

それから、小鳥たちは彼女の指だけじゃなく、帽子や組んだ足の先などあちこちにとまり出していった。

空の仲間とたわむれる彼女の姿は慈愛に満ちていた。少年やデラに対するあたりはなぜか強いが、やはり悪い人ではないらしい。こうしていると、彼女は動物と自然を愛するやさしいお姉さんといった感じである。少年はそんなふうに思いながらジェイミーのことを見ていたのだが、見すぎていたのだろうか、彼女が「なによ」とするどい視線を向けてくる。敵意を帯びたその瞳に少年は動揺したが、本音を言うと火に油を注ぎそうだったので、彼はごまかすように彼

女に尋ねた。

「いえ、その……どうしてまたぼくを連れてきたのかと思います」

「別に、あいつの弟子だっていうからどれほどのもんか見てやろうと思ったのよ」

「いやあ、弟子といっても、まだまだひよっこみたいなのでして」

「それぐらい、見たら分かるわ」

「いろいろと教わってはいるんですが……」

そう言っ、少年はデッキジャケットの胸内ポケットから魔術合金を取り出した。そしてそれを毎晩やっている練習と同じように、引き伸ばして棒状に変化させたり、また球形に変化させたりと簡単な造形をつくっていく。と、彼は己の未熟さに気落ちと照れ笑いが混ざったような顔を浮かべた。

「まだまだ、先は長そうです」

「……………」

そんなひたむきな少年を前に、ジェイミーは硬直していた。見れば、彼女の目が大きくひらかれ、ひどく素っ頓狂な顔を浮かべている。その異様なようすに、少年はビクツとからだを震わせる。

「ど、どうかされましたか？」

「べ、べつになんでもないわよ。それなりに、頑張っはいるようね」

「自分で言うのはあれですが、努力はしてるつもりです。でも正直、スランプ気味と言いますか、次の段階に進めずにいると言いますか、なかなかレパートリーを増やせずにいるんですよ。棒のかたちは安定するのに、ほかのかたちだとすぐ崩れちゃうんです。練習が足りないのかな……」

少年が難しい顔でつぶやきはじめる。

と、ジェイミーがさも興味なさげといった顔で口をひらいた。

「イメージが形で止まってるんじゃないの？ 形が内包する態むぎのイメージがおろそかになってるのよ。見たところ、その魔術合金はまだ生まれたばかりみたいだし、あんたのことなんて何も知らないわけで、あんたがどれだけつくりたい形をイメージしても、あんたにとってその形が何を意味するのか分からないからその形態を保てないのよ。棒のかたちだけがやたらと安定してるのは、あんたにとって棒という形が内包する態、つまり棒の振る舞いが定着してるからだ——」

そこまで言って、彼女は言葉を切った。自分へと向けられる視線に、妙なむずがゆさを感じたのだ。

見れば、少年が澄んだ瞳をかがやかせている。

彼女の言うとおりであった。形のイメージに集中するあまり、態のイメージという側面にまではあまり意識が及んでいなかったのだ。それに、自分にとって棒という形はたしかに態のイメ

ージが強く根づいている。デラさんへの憧れが土台となっているからだ。少年は的確なアドバイスをくれた黄玉色の魔女に尊敬のまなざしを送り続けていた。すると、彼女がたじろぎながら言う。

「な、なによその気色の悪い目は……」

「やっぱりデラさんと仲良しなだけあって、ジェイミーさんもぶつきらぼうに見えるけど実はとてもやさしい方なんですわね。小鳥たちに慕われていたのも納得です」

「ただ、誰と誰が仲良しだったのよ！」

ジェイミーの顔がボツと一気に赤くなる。耳まで真っ赤だった。仲良しと言われたのがよほど照れくさかったのだろう。彼女はすごい剣幕で少年の胸ぐらをつかみ、ギャーギャーと声を荒げて激しく彼を揺さぶっていた。勢いに圧倒され、少年が目を回しながら彼女をなだめようとする。

「ちよ、ちよつとジェイミーさん、あんまり暴れるとあぶな——」

「あくもう！ 馬鹿なことやってんじやないわよ！」

瞬間、ジェイミーの平手打ちがとんだ。

それは少年の背中にクリーンヒットし、その衝撃で彼はあわれにもコーネリアの背中から転げ落ちてしまうのだった。少年が重力に引っ張られ、地上に落ちていく。気づけば、すべてがスローモーションになっていた。

やばい、死ぬ——そう思った少年はとっさに持っていた魔術合金をコーネリアに向けて振りかざしていた。

刹那、魔術合金が淡い銀光を発し、鞭となってコーネリアの左脚に巻きついていく。少年のからだは上空でぶらぶらと揺れ動いていた。彼はいま、頭上を飛行するコーネリアの片脚に魔術合金でぶら下がっているのだ。心臓が爆発しそうだった。強風を全身に浴びながら、彼はかすれた声を出す。

「た……たすかった」

幸運なことに、少年の死にたくないという強いイメージが彼の能力をひとつ開花させたようだ。とはいえ、喜んでいる場合ではなかった。引き伸ばされた魔術合金が途中で千切れてしまえば、彼は再び地上へと真つ逆さまなのだ。少年がノドを鳴らして下を見る。彼はすぐに青ざめ、ジェイミーに助けを求めた。が、彼の声が聞こえていないのか、彼女は動かなかった。どうやら、少年が落ちたことにさえ気づいていないようだ。彼女はコーネリアの上でぶつぶつと独り言をつぶやいている。

「……勘違いも甚だしいったら……」

「ジェイミーさん！ ジェイミーさん！ ジェイミーさあん！」

「……だいたい、デラのやつがちゃんと……」

「助けてえ！ ジェイミーさん！」

少年は必死に呼びかけ続けたが、彼女はやはり背を向けたままだった。

そうこうしているうちに、だんだんと少年の手がしびれてくる。これは魔術合金より先に彼の手が限界を迎えるかもしれない。と、そう思ったそのとき、眼下に広がる景色にある変化が訪れはじめた。

見れば、穏やかな草原は姿を消し、棚引く霞のあいだから、黒々とした樹林帯が顔をのぞかせている。周囲には険しい岩山が天を目指して何本も突き出ていた。その強烈な自然観はまぎれもなく昨日見た光景に違いなかった。が、それらを超えたすぐ先に、見たことのない町並みが広がっていた。

※※※

ダルマスカ公国は豊かな国だった。

深い森と切り立った崖に囲まれたその景観は一見すると厳しい環境下にあるようにも思えるが、実際は水源が豊富にあるため、そこに息づく生命を育むのに十分な素質を有していた。自然を切り拓いてつくられた都市はいまでは自然との一体化を遂げており、その町並みは段状に削りとられた岩山の斜面に建つ家々や、左右にそびえ立った崖から流れる美しい滝、そしてその崖にはさまれるようなかたちで存在しているダルマスカ大公の居城などに特異な風土が見て

とれる。とりわけ、滝によって運ばれる二本の大きな水流はとも見応えがあった。しぶきを上げる滝の水はその後、石造りの水路を通って町の各所へと分岐しており、ここに住まう人々に自然の潤いを供給している。その青々とした清流と、植物たちの力強い緑色、そして国の土台となっている馴染み深い大地の茶色が組み合わさり、このような堂々たる文化が成立しているのだ。

「すごいですね。あんなに大きな滝が町並みに溶け込んでますよ」

「あんまりキョロキョロしないでよね。恥ずかしい」

「す、すいません、つい、珍しくて……」

と、少年が照れ笑いを浮かべる。

国境を越えた異郷の都市像は彼にとって興味深いものでいっぱいだった。

建造物の意匠、住民の服装、露店で販売している食材にはじまり、陽射しや風の匂いに至るまですべてが刺激的だった。深い森と高い崖によって区切られているとはいえ、位置的には獣人市場と近いため、全体的な印象はそこはかとなく獣人市場と似ており、隔絶された土地ならではの土着的な雰囲気があった。見れば、通りに並ぶ屋台には見たことのない謎の干し肉が吊り下げられている。そしてそのとなりの露店ではこれまた珍妙な野菜や果物がカゴにたくさん積みまわっていた。赤い毛玉のような果物や、また幾何学的な形をした野菜、さらにはカラフルなトウモロコシなどなど、どれもが一風変わったテイストを持っている。とは言っても、地元

人間が特に臆したようすもなく買っていくのを見ると、ここでは日常的に食べられている食材らしい。

「あ！ あれは何でしょうか？ ジェイミーさん」

「落ち着きなさいよ、田舎者に見られるじゃない」

言われて、少年は気づいた。

行き交う人々がみなこちらに注目しているのだ。

しかしながら、その視線はどちらかと言えば少年ではなく、先頭をゆくジェイミーの方へと向けられている。それも当然だろう。彼女もまたデラさんとタイプこそ違うが相当な美女なのだ。それに、やはりあの魔女然とした格好は目立つ。黄金のハサミはマントのなかに隠れているが、黒いとんがり帽子と凶悪なブーツ、そして黄玉色にかがやく長いおさげ髪はまさに存在感の塊だった。

そんな彼女は自身に浴びせられる熱視線を気にもとめず、町の通りを悠然と歩いている。デラさんもそうだったが、彼女らは人間たちによる好奇の眼差しをあまり気にしないようだ。などと考えていると突然、彼女がうしろを振り返って言った。

「ちよっと、なにジロジロ見てんのよ」

「いえ、その……ところで、これからどうするんですか？」

「別に、どうもしないわ。とりあえず適当にここらをぶらつくのよ」

「えっ？　でも——」

「しっ！」

ジェイミーの人差し指が少年のくちびるをふさぐ。

彼女は通りの真ん中で立ち止まると、両目を細め、黄玉色の瞳にするどい光をたゆたわせていた。そのすさまじい迫力にあてられて、少年の肌がビリビリとしびれていく。声をかけることなどできなかつた。そうして彼が固唾をのんで見守っていると、彼女のかたちのよい耳が何かを捉えたかのようにピクリと動く。すると、次いで彼女は一目散に何処かへと歩いていくのだった。

「ちよつと！　ジェイミーさん！」

少年があわてて彼女のあとを追いかける。

が、そのとき、彼は焦げ茶色のぼろきれを頭からかぶった浮浪者らしき老人とぶつかってしまった。お互い転ぶほどの衝撃はなかつたので、少年は手早くあやまるとそのままジェイミーの方へと走っていった。そんな少年の背中を、薄汚れた浮浪者はじつと、ただひたすらじつと見つめ続けていた……。

ようやく彼女に追いつくと、そこには妙な人ばかりができていた。

場所は教会の正面にあたり、すぐ裏手には鬱蒼と茂る黒い森が口をあけている。水路はここ

にも伸びていたが、あまり陽の光が入らない場所のようで、流れゆく水はすこしだけ濁って見えた。

そんな中、ジェイミーは群がる人々からすこし離れたところで佇んでおり、真剣な表情で騒ぎの中心を見つめていた。少年はよこ目でざわめきの正体を探りながら彼女のもとへと駆け寄り、尋ねる。

「なにかあったんですか？」

「森でまた死体が見つかったそうよ」

死体と聞いて、少年の心臓がドクンと脈打つ。

彼はこども特有の身軽さを利用し、人だかりの隙間から顔を出した。

すると、担架にのせられ、運ばれていく遺体が目に入る。

遺体には白いシャツが掛けられていたが、担架の端から血まみれの腕がはみ出し、だらりと垂れ下がっていた。腕の肉は削がれ、露出した指の骨から血が滴って地面に生臭いシミを点々とつけている。腕の状態からして、全身の損傷はかなり酷いものだろう。上半身の厚みがないことを考えると、その損壊状況はどことなく森で見た女性の遺体を連想させた。遺体は武装した数人の兵によって運ばれ、人混みを散らしながらすぐに見えなくなつたが、遺体を持ち去られたあとも、しばらく人だかりは消えなかった。耳をすませば、なにやら不穏なひそひそ話が聞こえてくる。

「———そういや、薬屋の娘も行方不明って———」

「———スワンプ・サリーがまた出たらしい———」

「———公国軍が討伐隊を編成して獣狩りを———」

「———大公さまも頭を抱えているだろうな———」

そう言つて、若い男性が崖のあいだに建てられたお城を見上げる。

少年もそれにならない、お城の方に目を向ける。

土と石で造られた、非常に風格のある城だ。左右の崖や後方の土壁と同化するように建造されており、その威厳に満ちた外観は城と宮殿を足したような独特の意匠を呈している。聞くところによれば、君主であるダルマスカ大公もまた、この城に負けず劣らずの貫禄を持った人物らしい。

住民たちのひそひそ話はとりとめもないうわさ話の類から、徐々に大公による治世のかげぐちに変わっていった。そのさい、ふと住人の口からフェルフィーナ公女の名前が出る。少年はそれに食いつき、さらに彼らの話を盗み聞こうと近づいていった。が、その態度がどうも不自然だったようで、すぐに住民たちに気づかれてしまう。とたん、住民は胡乱な目つきで足早に去っていった。

「あらら、行っちゃいましたね」

「この国は歴史的にあまり治安が良くなかったからね」

余所者にはつめたい。

彼女が言いたいのはそういうことだろう。箱の中の男も告白文のなかで民衆の態度は冷やかかなものだったと述べていた。一般人でさえそうなのだから、それが物々しい眼帯をつけた見知らぬ少年と威圧的な怪しい魔女だったとしたら、なおさら彼らに警戒されて当然である。しかも、うわさ話には異国の獣使いによる異種間混血獣の犯行なんていう突飛なものまで出ているのだ。この扱ひも致し方ない。少年は如何ともしがたいといった表情でジェイミーを見上げる。

「どうします？」

「手紙の男が泊まった宿は？」

「それが、宿の名前が書かれてないんですよ」

「使えないわね、その男。雑誌記者の端くれのくせに」

「もともと恐怖に負けないようにするためであって、誰かに助けを求めて書いた文章ではないですからね。それに最後の方は精神に異常をきたしていましたから。たしか、故郷であるカッシュデールの名を呼んで、デール、デール、愛しい犬のしっぽ……と、わけのわからないことを——」

「——あら？ なにかしら？」

「——え？」

問いかけられて、少年が振り返る。

と、そこには買物かごを持った若い娘の姿があった。年は二十歳ぐらいで、ほどよい長さのうしろ髪を黄色いリボンでまとめているが、かなりのクセ毛の持ち主らしく、まとめた髪が弧を描きながら上に向かつてはねていた。また服装は庶民的であり、その素朴な雰囲気のおかげに澁澁とした愛嬌がある。突然の呼びかけに少年が戸惑っていると、彼女は一步近づき、再び彼に尋ねた。

「ぼく、いまわたしのことを呼んだでしょ？」

そう言って、娘があどけなく首をかしげる。その瞬間、彼女のうしろで束ねられた茶色い髪が愛らしくふりふりと揺れ動いた。そんな彼女のチャームポイントを見て、少年が思わず言葉を発する。

「あ、犬のしっぽ……」

※※※

「ええ、そのひと、たしかにうちにきたわ」

彼女はお盆の縁をテーブルに押しつけながらはっきりと断言する。

少年はあのあと、彼女に事情を説明し、宿の奥に通してもらっていた。

娘はとても気前がよく、少年がその国からきたことを知ると、お菓子やジュースでもなしてくれた。しまいにはごはんまでごちそうすると言ってくれたのだが、さすがにそれは遠慮させてもらった。そこまで甘えるわけにはいかないし、なにより死体を見たばかりで食欲が失せていたのだ。なお、ジェイミーさんは宿のそとで待機している。彼女は宿の娘からいろいろと情報を訊き出してこいと少年に指示を出し、すぐに姿を消してしまったのだ。そういうわけで、彼はいま彼女の部屋でひとり聞き込みをしているのである。少年は娘の返答を受けて訊き返した。

「本当ですか？ デールさん」

「ええ、わたし、口説かれちゃったもの」

と、娘の顔がぼつと赤くなつた。

一方で、少年は背筋に青白い悪寒のようなものを感じていた。

目の前の彼女があの手紙に登場した宿屋の娘ということは、箱の中の男の手紙はやはり悪戯などではなく、実際に起こった怪事件の証拠ということになるのだ。少年は悪夢が現実世界に浸み出してきたかのような息苦しさを感じていた。そんな彼の気も知らず、彼女は明るい声で続ける。

「けど、ふられちゃったみたい。きつとからかわれたのね」

言つて、彼女が照れたように微笑む。

デールさんは手紙に書かれていたとおりとても人懐っこい性格だった。少年やジェイミーの奇抜な風貌を見てもまったく警戒しないとは、能天気を通り越してむしろ肝が据わっていると言っているかもしれない。彼女は臆することなく、少年の円窓眼帯やジェイミーの服装について尋ねた。そういった彼女の性格が鬱陶しかったため、ジェイミーは少年にすべてを託してそくさと退散したのだろう。とはいえ、その性格が幸いして、こうしていろいろと教えてくれるのだから少年としてはとてもありがたかった。彼はすこしでも多くの情報を得るべく、さらに娘に尋ねる。

「デールさん、その人がどこへ行ったかご存知ありませんか？」

「ごめんなさい、分からないわ。あのひと、お金だけ置いて知らないあいだに消えちゃったからなあ」

「そうですか……なにか手がかりでもあればと思ったんですが」

「もしかしたら、沼の亡霊ヌラシキカミにつれていかれちゃったのかしらね」

——沼の亡霊。

少年の耳がその言葉に反応する。

「それでも耳にしたんですが、そのスワンプ・サリーっていうのは何ですか？」

「この土地に古くから伝わる邪悪な妖精のことよ」

彼女曰く、その妖精は霧の深い日に現れるらしい。腐乱した鬼女のような見た目で、沼から

這い出てきては森のなかをひたひたと徘徊し、そして淀んだするどい爪と牙で獲物を引き裂き食らうのだという。どこにでもあるような伝説だ。しかし、実際に食い荒らされた死体が出ているため、あまり無下にもできなかった。少年は現実を凌駕した世界を知っているのだ。それゆえ、彼は真剣な表情で彼女の話聞いていたのだが、それが彼女の目にはすこしおかしく見えただろう。

「ただの子ども部屋ナースリー・ボギの妖精よ」

そう言つて、デールはクスクスと微笑んでいた。

しかし、ふとその顔にかげりが走る。

「でも、最近は、なにかよくないものが本当にいるような気もするわね。ひどい死体が次々と見つかつてるし、クラリツサ——わたしの友人で薬屋の娘なんだけど、彼女も先日、行方不明になつちやつたのよ。薬草をとりに行くつて森に入ったきり……この肌がざわめくような嫌な感覚、なんだか、あのときみたいだわ」

「あのとき？」

「ええ、三年前……フェルフィーナ公女が亡くなったときのことよ」

話によれば、彼女は動物が好きなのさしい少女だったらしい。きびしい大公と世間知らずの公妃のあいだに生まれた末の娘で、兄や姉と違って王族の血を感じさせぬ穏やかな性格だったそうだ。そしてある日のこと、そんな公女が犬の散歩から戻らないという事件が起こった。捜

索を続けたが見つからず、そのうち日も沈みはじめ、あたりはどんどん闇に飲まれていく。するとやがて、娘の無事を祈る公妃のところへ散歩に行っていたはずの犬が息せき切って戻ってきた。見れば、リードは噛みき切られており、その小さな口もとには少女の履いていた赤い靴が啞えられている。公妃は靴を持ったまま森の中の沼地へと走り出した。少女の靴に、汚れた泥のあとがついていたのだ。それから、公女の遺体はすぐに沼から引き上げられた。彼女がなぜ散歩の途中で危険な沼に立ち寄ったのかは分からない。しかし、純然たる事実として、その日、そこには彼女の死が残されたのである。悲劇は、彼女の誕生日のちょうど前日のことであった。

フェルフィーナ公女の死はダルマスカ公国に深い悲しみをもたらした。

もともとあった沼の亡霊伝説はその頃から色を濃くしはじめたという。あの沼地には何かいる、公女はそいつに殺されたのだと……話はまだ終わらない。デールはつらそうな表情で続けた。

「しかも、公女さまが亡くなってから——」

公妃はよほど公女のことを愛していたのだろう。彼女は公女が亡くなってから部屋に閉じこもることが多くなつた。夜ごと公女の幻影に涙を流しては、暗がりのなかで彼女の姿を求めさまよい歩いていたという。そしてとうとう、オカルティズムに手を出したのだ。亡き愛娘の魂を呼び戻すために、彼女は怪しげな妖術使いを何人も城に呼び込んでいた。やがて公務の同行

はおろか、公の場にさえ姿を現すこともなくなり、彼女の存在は次第に腫物として扱われるようになっていった。一方で、彼女の行動はどんどんエスカレートしていった。世界中からいわくつきの呪物を集め、そのために散財し、ついには城のお金にも手を出してしまったほどである。頭を悩ませた大公は彼女を城の一室で療養させることにしたが、あまり効果はなく、彼女は夜になるとすきを見ては部屋から抜け出し、公女の亡くなった沼地を目指して森の方へと足を運んでいたという。そしてそんなことが続くうち、いつしか公妃は部屋を抜け出たままその姿を暗ましてしまったそうだ。

「行方不明ってことですか？」

「ええ。でも、十中八九……亡くなってるでしょうね」

「それはまた……どうして分かるんです？」

「だって最後に見た公妃の顔は……」

まさに死人のそれだった。

彼女はそう言いたかったに違いない。我が子を亡くした母の気持ちとはいったいどれほどのものなのか。

言葉を探し続ける少年の頭に、ふと列車事故のさなかで見た母の死に顔がよみがえる。暗闇にぼんやりと浮かぶ、色を失ったやわはだの、恐ろしさと、悲しさに……と、そのとき、デー  
ルが明るい声で言った。

「それから、大公はすぐに別の女性と再婚してこの話は終わり」

「再婚ですか——」

大公のこの行動も、君主としては当然のことだろう。

ダルマスカ公国は自然と共にあるがゆえ、文化思想の根底に弱肉強食的な思想が少なからず流れている。その地位は近隣諸国との友好的な関係で確立しているわけではなかった。それはいま巷を騒がせている連続惨死事件のうわさ話のなかに異国の脅威がちらついていることから窺える。つまり、内政のゴタゴタが続くと、他国に寝首を掻かれる危険性もあるのだ。とはいえ、ろくに公妃の搜索も行わぬまま穴埋めのように伯爵家の令嬢を娶ったことに対し、自国の民から批判の声も上がったようだ。為政者としては微妙な立場だっただろう。だが、そうした声に怯まず新しい妃をすぐに迎え入れたダルマスカ大公はやはりうわさに違わぬ現実主義者のようである。

「なるほど、三年前にそんなことが……ところで、その沼はどこにあるんですか？」

「近づかない方がいいわよ。サリーに食べられちゃうかも」

「大丈夫ですよ、子ども部屋じゃありませんから」

その冗談に、ふたりはしばし笑い合った。

宿を出ると、ジェイミーの姿が見あたらなかった。

少年は彼女を探して宿の周辺を歩いていたのだが、そのとき、彼の鼻先に葉っぱが一枚、ひらひらと落ちてくる。上を見ると、なんとジェイミーが木の頂に立っているではないか。彼女は目を閉じ、風を感じているようだったが、少年の気配に気づいたのか、その目をあけると空中にひよいっと跳び上がった。そしてマントをはためかせながら少年の目の前へと華麗に着地してみせる。

「それで？ なにか収穫はあった？」

「は、はい、実は——」

※※※

沼に行くなら、ラズロール教会区の墓地を抜けるとよい。

デルルさんから教えてもらった情報をもとに、少年らは亡霊サリが出るという例の沼地を目指して歩いていた。町の喧騒が次第に森の緑に侵食されてゆき、そしてひとの声が動物の鳴き声にすりかわっていく。

と、気づけば、彼らは墓地のなかに立っていた。

あたりの地面は荒れ狂う海面のように波打っており、その斜面にはたくさんの墓石が建てられている。手入れはされておらず、墓地には物悲しい風が吹き、朽ちかけの葉っぱが周囲でそ

ぞろに舞っていた。デールさんによると、フェルフィーナ公女が亡くなったあと、沼の亡霊が墓地の死体を食い荒らすという風説が出回ったため、沼地から離れた別の場所に新しい墓所がつくられたそうだ。それゆえ、いまではこちらの墓地は野ざらしに近い状態らしい。また墓地の中心には十字架をかたどった大きな石碑が設置されている。墓地の道はその石碑を起点に前後左右へと伸びており、敷地を四つに区分けしていた。少年はそんな墓地の十字路をまっすぐ進んでいった。

まわりの緑樹がいつそう濃密なものとなり、先へと続く小道もまたさらにケモノ道の色合いを強めていく。と、それからほどなくして、デールさんの言っていたとおり例の沼地に到着した。

そこは……いくつもの陰鬱な樹木に囲まれた場所だった。

水分が地面に浸み出して、気をつけていないと足をとられそうになる。要の沼は歪な円形を描いており、湖面ならぬ沼面の至るところからねじくれた奇形樹を伸ばしていた。また水面は見るからに毒々しく、淀んだ紫色で、表面に白い花びらをちらほらとのせている。泥深き存在感はたしかに魔的な印象を有しており、少年に魔女の大鍋の縁に立っているかのような錯覚を覚えさせていた。彼女はここに落ちたのだ。この沼で、彼女は、フェルフィーナ公女は亡くなった。

「落ちるんじゃないわよ」

ジェイミーの忠告を受け、少年は屈んで沼をのぞき込む。

暗い——底なしのそれはまるで冥府へとつながっているかのようだ。

濁った水面に、少年の顔がぼんやりと映っていた。

陽光に揺らぐ己の顔を見つめながら、彼は思考をめぐらせる。

手紙の最後に、箱の中の男【エリック・ベーカー】は亡きフェルフィーナ公女の姿を見たと言っていた。あれは男が見た幻覚だったのだろうか。それに、三年前に書かれたはずの手紙がなぜ今頃になって世に出てきたのか。デールの言っていた友人、葉屋の娘【クラリッサ】は状況からして獣人市場の帰りに見つけたあの遺体のように思えるが、だとしたら、彼女はあの手紙をどこで見つけたのだろうか。そしてまた、なぜあんなところで朽ち果てていたのか。葉草をとっている途中で何かに襲われ、あそこまで逃げてきたのか。エリック・ベーカーが暴漢に襲われたのも森のなかだったはずだ。どうも偶然ではない気がする。この霧ふかき獣の森には何か……。

そのとき、少年の脳裏に不可思議な映像がよぎった。

——草木も眠る丑三つ時、暗澹たる森の中に消えゆくひとりの女性。

イメージは断片的で、また一瞬だった。

霧と夜に阻まれて、その顔すら分からなかったが、少年には誰だか察しがついていた。公妃はいったいどこに消えたのだろうか。沼の水面を見つめながら、彼の視界は虚ろな影を幻視す

る。森に入って消息を絶つたということは、まさか亡き愛娘の面影を求めるあまり、彼女もまた――。

少年のあごから汗がひとつぶ、こぼれ落ちる。

と、沼は彼のけわしい顔を波紋のなかで噛み砕いていった。

顔が歪み、バラバラになつて溶けていく。それはまるでさまじな顔に変化しているかのようだった。男性、女性、何百人もの顔が入り乱れ、激しく遷り変わっていく。そのどれもが苦悶の表情を浮かべていた。そして波紋が静まり、波間に消えるその最後に現れたのは、ひどくやつれた女鬼の相――。

瞬間、近くの茂みで葉擦れの音が鳴り響いた。

その音につられ、少年が沼へと落っこちそうになる。見れば、彼をのせていた沼の縁がぬかるみ、傾斜をつくつていた。彼の姿勢がつんのめり、沼に引き寄せられていく。が、彼はすんでのところまでジェイミーに襟をつかまれ、一命をとりとめた。彼女は少年をうしろにぼいっと放ると、あきれたように言う。

「まったく、言わんこっちゃない」

「た、助かりました。ありがとうございます」

ドテッと尻もちをつき、少年がジェイミーにお礼を述べる。すると、また茂みの方からガサガサと音が鳴った。

何かいる……そう思った少年は懐から魔術合金を取り出すと棒状にし、問題の茂みへと近づいていった。そして思い切って茂みをひらく。が、そこには何もいない。首をかしげる少年であったが、ふいに、彼の視界を何かがかすめていった。それは草木のあいだをものすごい勢いで走っていく。

少年は反射的に追いかけていた。しかしながら草木が邪魔で走りにくく、まるで追いつかない。それでも、彼は音と残像を頼りに鬱蒼と茂る森のなかを追いかけていった。そしてようやく広い場所に出たと思ったら、すでにそこには何者の影もなく、ただ大きな樹木たちが風に煽られながら立っているだけだった。気配は完全に消えている。どうやら、まかれてしまったようだ。少年が悔しそうな顔を浮かべていると、うしろの方からジェイミーの不機嫌そうな声が響いてきた。

「ちよつと！ 急に走り出さないでよ」

「すいません、何かがすごいスピードで逃げて行って」

「逃げられた、でしょ？ それなら今日はもう引き上げましょう」

「でも……」

少年は名残惜しそうに森の奥を見つめていたが、そこで彼の腹の虫が思い出したかのように大きな唸り声を上げてしまったため、彼はジェイミーに従い町へと引き返していった。草木を押し分け、ふたりはきた道に戻っていく。そのさい、ふとジェイミーが歩みをとめ、後方にそ

びえる樹葉の一本を見上げた。彼女は枝葉の囁きにしばし耳を傾けていたが、少年に呼びかけられると再び歩き出した。

※※※

スプーンにのせた熱々のラザニアを、少年は口の中へと運び入れる。

ふたりはいま、デールが働く宿の一階で晚ご飯をとっていた。

酒場と食堂が融合したような簡素で小さなお店だが、なかなかどうして風情がある。宿のお客さん以外にもひとが入っていて、常連客もいるようだった。カウンター席では酔っぱらったおじいさんとデールが楽しそうに談笑している。一方、少年とジェイミーはすみの目立たないテーブル席に陣取っており、天井から吊り下げられたランタンのもと、異国の料理を楽しんでいた。

口の中のラザニアが溶け出し、舌の上でホワイトソースの甘みと塩気が広がっていく。そしてそのあとから、この地方独特の香辛料がスパイシーな風味を残していった。テーブルの上にはサンドイッチやサラダも置かれており、露店で見たあのカラフルなコーンが存在感を放っている。また向かいの席ではジェイミーが骨つきチキンを食べていた。香草をまぶしてしっかりと焼き上げているため、食欲のそそるいい匂いが少年の方にまで漂ってくる。その誘惑は自然

と彼の意識を絡めとり、彼の視線を彼女の手元に引き寄せていた。と、そんな彼を見て、ジェイミーは言った。

「ん？ 一本ほしいの？」

「いえ、とり肉はちよつと……」

「あら、意外ね。好き嫌いがあるなんて」

「その、好き嫌いというわけではないんですが……」

少年が複雑そうな表情をする。

彼はいまコーネリアのことを思い出していたのだ。

彼女は町に入る直前、近くの森に着陸すると無数の螢火となって姿を消した。無論、ジェイミーの指示で彼女は彼女のねぐらへと帰っただけなのだが、そのさい、彼女は少年に向かってウインクをしてみせたのだ。その愛らしい印象が少年の記憶に残っていたため、調理されているとはいえ、とり肉を食べることに若干の抵抗感が生まれていたのである。彼はそれを言葉にするのを迷っていたのだが、ジェイミーはそれもお見通しといった感じで、そんな彼にさりげると言った。

「命は他の命でないとまかな賄えないものよ」

「そう……ですよね」

「自然の掟、生命の本質、現世の摂理に背けば人は生きてはいけない」

「甘ったれた感情だつてことは分かつてゐるんですが……」

言つて、少年はうなだれる。

と、ジェイミーはニヤリと笑つて続けた。

「とはいえ、ルールは破るためにある、とも言うけどね。それに、あんたは出会つてまもない彼女の事を想つてとり肉を食べることをためらつた。その事実をコーネリアが知つたら、彼女、きつと喜ぶわよ。ま、わたしと彼女の関係はとづくにそれを超えたところにあるから、わたしはこのチキンを美味しくいただくし、この命のしずくだつてありがたくちようだいしちゃうわけだけど」

そう言つて、ジェイミーはグラスに入つたワインを口に流し込んだ。

彼女がからになつたグラスを持ち上げ、テーブルに向かつておかわりを注文する。

一方で、少年は不思議な気持ちになつていた。

——耳職人。

ジェイミー・スクリーム。

ルールを説きながら、ルールを破れとは、なかなかめちやくちやなことを言う。しかし妙な説得力があつた。一聞しておおざなりな発言のようだが、逆に、一周まわつて箴言しんげんのようにも思えてくるから侮れない。思慮深いデラさんに比べてどこか傲慢な印象がある彼女だったが、やはり彼女も創世の大魔術師、真意こそよく分からないが、黄玉色のかがやきは伊達ではなさそ

うである。

と、気づけば、まわりの客が物珍しそうにジェイミーの方をちら見していた。なるほど、彼女の存在感は隠しても隠しきれないようだ。少年は気まずさをまぎらわすため、空咳をまじえて彼女に話かけた。

「あの、ジェイミーさんはこの事件をどう見てるんですか？」

「そうね……まるで、ジェヴオーダーの獣ね」

「ジェヴオーダーの獣？」

少年が訊き返す。

説明によれば、ジェヴオーダーの獣とはその昔、フランスという国のジェヴオーダー地方に出現し、百人以上の人間を食い殺した正体不明の獣のことらしい。悪夢のような連続殺人はあつたのかはよく分かっていないそうだ。ハイエナ説、異種間混血獣説、異常者説、狼人間説、果ては神罰説から邪悪な魔術師により遣わされた魔物説などさまざまな憶測が囁かれたが、結局、謎は謎のままで終結したという。

「じゃあ、今回の怪事件も巨大な狼が人々を襲っているんでしょうか？」

「どうかしら。それはまだ、なんとも言えないわね」

口もとをふきながら、ジェイミーが答える。

次いで、彼女は両手を合わせて「ごちそうさまでした」と唱えた。見れば、彼女のお皿はもうからっぽで、そこには鳥の骨がきれいに並んでいる。彼女はすつくと立ちあがり、テーブルの上に代金を置くとそのまま早に部屋へと戻っていった。少年はあわてて自分の皿に残っていた最後のひとくちを頬張った。そしてカウンターにいたデールに「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」と告げると、彼女にその代金を渡し、急いでジェイミーのあとを追うのだった。

借りた部屋は宿の二階にあった。

庶民的な宿なので部屋もすこし手狭であるが、ひと通りのものはそろっている。棚の上には花瓶が置かれ、清らかな白い花が生けられていた。ベッドは脇にひとつ大きなものが置かれており、その先には机と窓がある。そとは暗くなりはじめていた。あと一時間もせずこの町は夜陰に沈むだろう。少年は窓からのぞく町並みを眺めながら、ふと、部屋にいたジェイミーの声をかけた。

「ひと部屋だけでよかったですか？」

「……………」

返事はなかった。不思議に思っただけで少年が振り返ると、彼女は黙したまま何もなしの壁の前に佇んでいた。

はて、彼女はいったい何をしているのだろうか。

と、思った矢先、彼女の手がマントをなびかせ、ベルトに収められていた黄金のハサミを引き抜きはじめた。その挙動の意味が分からず、少年は尋ねようとしたのだが、それを言い切る前に、彼女は壁に向かって勢いよくハサミを突き刺してしまうのだった。あまりの暴挙に少年は彼女を非難した

「あんまりですよ！　いくら部屋が気に入らないからって！」

「違うわよ！　わたしをどんな目で見てるの！」

「じゃあ……まさか、となりの部屋に敵でも？」

「それも違う！」

憤慨し、彼女が突き刺したハサミを鍵のようにひねって引き抜く。すると、ガチャンと錠の外れる音が響き、木造の壁に幾何学的な亀裂が走っていった。そしてその亀裂を軸にして壁が左右へと動き出し、なんと、部屋の壁に横穴ができてしまったのだ。横穴は薄暗く、その奥に何があるのかよく見えなかった。しかし突然、チカチカと謎の発光が生じ、穴の中がパッと明るくなる。

見れば、数歩ほど行ったところに頑丈そうな扉があった。扉は灰色のレンガに埋め込まれたように存在しており、その上部には暴力的かつ芸術的な看板が掲げられている。どうやら、光はそこからきているようだ。看板は壊れ気味で、やや傾いているものの、そこに刻まれた文字

列はオレンジ色の電飾で印象的にかたどられており、パチパチと強い火花を放っている。少年はその激情的な文字列をなんとか解読し、読み上げた。

「スタジオ……スクリーム？」

「ええ、わたしのねぐらとつながってるの」

そう言つて、ジェイミーがドヤ顔をする。

「あ、たしかデラさんも……」

少年は思い出した。

彼が原書協会の陰謀に巻き込まれ、はるか地の底で絶望に打ちひしがれていたとき、デラさんが銀飾のスプーン【シルヴィア】で土壁に文字を掘り、その土壁の奥から酒場オッド・アイへとつながるオシヤレな扉を出現させたことがあった。対して、ジェイミーさんはハサミを鍵のように用いることで【スタジオ・スクリーム】という彼女の住居につながる部屋の扉を出せるらしい。

なお、彼女のスタジオは音楽関係の設備が整った場所で、ギターやドラムなど数々の楽器が弾き放題らしい。ちなみに、彼女が最も得意とする楽器は電気ギターエレキとのことだった。と、そんなジェイミーの自慢げな説明を静かに聞いていた少年だったが、その一方で、彼の視線はまわりの壁に貼られた無数のポスターにあった。バヨネット、ドレンクロム、トゥースフェアリー、スーサイドアップルなどなど、どれもがデザイン性の豊かな文字とイラストで描かれてお

り、見ているだけで楽しかったのだが、それらのなかに一枚、ひとときわ少年の目を引くものがあった。

「あれ？ これって——」

少年がポスターに指を這わせる。

そこには燃えるようなオレンジ色でジェイミー・スクリームと綴られていた。

白黒の背景に、シンボリックな色文字が印象的に走っている。また髪の毛の長い女性がギターを掻き鳴らしている写真が載っており、その迫力ある構図からはギターの強烈な音色と彼女の叫び声が直に聞こえてきそうなほどだった。まさかと思い、彼はうしろに佇むジェイミーを見やる。と、彼女は笑いながら言った。

「残念、わたしじゃないわ」

「違うんですか？」

「ええ、ずっと昔、そういうロックバンドがあったのよ」

彼女曰く、とても良い曲をつくるグループだったらしい。独創的で、衝動的で、なのにごどこか寂しさを秘めていて、彼女たちが奏でるメロディーには魂があったという。奇しくもヴォーカルの名前が彼女と同じジェイミーという名前だったため、尊敬の意と遊び心から、彼女もまた、ジェイミー・スクリームと名のすることにしているのだそうだ。それを聞き、少年はうなづいた。

「そうだったんですね。スクリームなんて珍しい名前だとは思ってましたが」

「あんたが言う？ ミスターブラックパッチくん」

そう言つて、ジェイミーが少年の眼帯に手を伸ばす。彼女は眼帯のベルト部分を指で引っぱり、すぐに離れた。瞬間、ベルトが勢いよく戻つて少年の顔を打ちつける。驚いた少年が思わず顔をしかめると、彼女はそのすきをつき、飄然とスタジオ・スクリームの扉に手をかけるのだった。

「と、いうわけで、わたしはこっちで寝るから」

「あつ、ジェイミーさん」

と、少年があわてて彼女を呼びとめる。これといって呼びとめるほどの用事もなかったのだが、とりあえず、明日の予定ぐらいは訊いておきたかった。それに大丈夫だとは思うが、この横穴のあいた壁がちゃんと元通りになるのかどうかも気がかりと言えば気がかりである。しかしながら、ジェイミーは振り返ることさらにイタズラな笑みを浮かべ、少年をからかうように言った。

「あら？ もしかして、ひとり寝られないの？」

「そ、そんなわけないでしょう！ いつも寝てますよ、ひとりで」

「ならひと安心。なにかあつたら呼びなさい」

少年の抗議をかるく受け流し、ジェイミーは扉の奥へと消えていった。

ちらりと見えた扉のすきまからは階段と通路が伸びている。どうやら、その向こうに彼女の邸宅があるらしい。少年は自分の師であるデラさんと肩を並べる大魔術師の家がどのようなものなのか気になったが、たいした用もないのに追いかけたらまたからかわれるかもしれないので、潔くベッドへと足を運んだ。

——試読版(了)

第三章【哀と愛しみの狭間で】に続く

<作者より>

試読版をお読みいただき誠にありがとうございます。本作の続きが気になる方はぜひ有料版【眼球職人デラ ② ダルマスカ公妃の愛獣】をお求めください。

——病葉 雨月

<禁止事項について>

無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載はご遠慮ください。悪質な違法公開につきましてはサーバー会社への通報及び損害賠償の請求等相応の対応をとらせて頂きます。

※本作はフィクションです。本作に登場する人物や宗教、言語等は現実のものといっさい関係ありません。